

Title	振り捨てきれない遺産：戴震『毛鄭詩考正』における宋代詩經學の引用の意義
Sub Title	An inheritance that cannot be relinquished : significance of Dai Zhen's quotations from song commentaries on Shijing in MaoZhengshikaozheng
Author	種村, 和史(Tanemura, Kazufumi)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2017
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 中国研究 (The Hiyoshi review of Chinese studies). No.10 (2017.) ,p.35- 107
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	関根謙教授退休記念号 附表
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12310306-20170331-0035

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

振り捨てきれない遺産

——戴震『毛鄭詩考正』における宋代詩經學の引用の意義

種村和史

1 問題設定

清朝考證學を代表する學者戴震（一七二三—一七八八）の詩經學を研究するにあたっては、從來、『毛鄭詩考正』（以下、『考正』と略稱）四卷・卷首一卷¹、『杲溪詩經補注』（以下、『杲注』と略稱）二卷が主たる資料として用いられてきた。ところが近年、戴震のもう一つの詩經注釋書が抄本の形で發見され、學界に見やすい形で提供された²。いわゆる『毛詩補傳』（以下、『補傳』と略稱）二十六卷、目錄一卷がそれである（本書は、抄本の表紙に「戴氏經考」の外題が記されているが、その規模體例が、戴震の「毛詩補傳序」⁴に説明されているのと一致しているため、この書名が通行される。本稿もこれに従う⁵）。『考正』『杲注』はいずれも戴震の詩經學の全貌を窺い知るための資料としては大きな限界を持っていたのだが、新たに世に現れた『補傳』はそのような研究上の困難を解消し得る内

容を持っていた。

『補傳』は、戴震の若年の著述と考えられるが、詩經全篇にわたる注釋であり、かつ詩篇の各章ごとに字義の訓詁・詩句の意味などを説明した後、篇題の下に一篇の主旨についての彼の見解が示されていて、完備した體例を有する著述である。そこに示された考證は後の『考正』『杲注』にも共通するところ多く、生涯にわたって保持された經說および詩經に對する認識の原形を豊富に含んでいる。さらに『補傳』の體例は『杲注』によく受け繼がれており、戴震の考える詩經注釋書が具えるべき内容的要件とその表現形式は、早くもこの書において實現されているということが出来る。このように、『補傳』は戴震の詩經に對する早期の研究の總決算であるとともに、戴震の詩經學の本質的性格を把握するために重要な情報を提供する著述である。この新發見が契機となつて、『補傳』を核にして戴震の詩經學を考察した業績が、これまでに多く發表されてきた。^⑦

『補傳』の特徴の一つとして、宋代詩經學の經說が數多く引用されていることがある。これについては先行研究でもしばしば注目されているが、しかしそれが戴震の詩經學の歷程においてどのような意味を持つかについては、諸家の間で必ずしも評價が定まっていない。例えば、陳海燕氏は、

『補傳』を通覽してわかるのは、戴震が舊說を引用するにおいて、「詩經漢學と詩經宋學の學說を兼ねて採用し（漢宋兼采）」、「學派的思考に立つた偏狹な見方（門戶之見）」を持たなかつたということである。彼は、漢學はむしろ重要であるが、宋代の經說も一方的に排除するのはよくないと考えており、本書の中で引用した宋代の經說は少なくない。^⑧

と言ひ、宋代の注釋の引用は戴震が學派に囚われない廣やかな研究姿勢を有していたことを表すとして積極的に評價する。一方、楊應芹氏は『補傳』を『考正』『杲注』『杲注』と比較した上で、

『補傳』を後の戴震の二部の詩經研究の專著〔『考正』『杲注』——筆者補記〕と比較してみると、朱熹・呂祖謙・謝枋得ら宋人の詩說を引用することがかなり多く、しかも、それらに對して肯定的評價を下している場合が多い。このことは、三十二歳で都に入る以前、戴震は、程朱理學を「理明らかにして義精なるの學」と考えていたことを表している。彼自身は實際には「程朱理學」の忠實な護持者であつたのである。^⑩

と言ひ、宋儒からの引用が多いのは、戴震がいまだ宋代理學の學的影響下にあつた時期の著述であるためで、その學問が未成熟で過渡的段階に止まつていたことを表すとする。兩者の評價がこのように對照的なのは、清朝考證學的詩經學にとつて宋代詩經學がどのような存在であつたかについての研究が十分に進んでいないことの反映である。楊氏の發言には注目すべき點が二つある。第一に、戴震が宋代詩經學を引用したことを、彼が程朱理學の影響下にあつたことと等價に考えていることである。實際には、宋代詩經學者は必ずしもイコール程朱學者ではない。宋代詩經學が覆う範圍は、程朱理學の領域をはるかに超える。宋代詩經學は二程の活躍した時代に先んじて本格的に展開しており、その擔い手には學術・思想的に程朱學と異なる基盤に立つ者も多い。さらに朱熹が程頤の詩經學に對してむしろ批判的な發言を残していることから考えれば、詩經學において「程朱の學」と一括して扱うのは無理がある。^⑪それに止まらず、朱熹の詩經學がいわゆる彼の性理の學の體系の枠内に收めて理解し盡くせるかどうか、今後の研究に俟つところが大きいと思われる。楊氏の發言にはこれらの事情が捨象されている。

第二に、宋代詩經學の影響の有無を戴震の學術的到達度を測る指標としようとしていることである。その基底には、醇乎とした清朝考證學的詩經學は宋代詩經學と手を切ったところにはじめて成立するのであり、宋代詩經學とは全く異質の獨立した方法論と理念によって展開されてこそはじめて眞の意味での清朝考證學的詩經學と呼び得るという考え方があつた。これは例えば、戴震の再傳の弟子である陳奐が毛傳獨尊を高らかに掲げて研究を行ったのを典型と見なし、その『詩毛氏傳疏』のような著述をゴールに据え、それとの距離によって各學者の到達度を測るというイメージで捉えられよう。このような考え方からすれば、清朝考證學的詩經學はそれ自體で純然たる體系として自足し完結しており、そこでは宋代詩經學の經說は異質の要素として表層的に附加されるのみで、兩者は最後まで異なる學問としてついに融合することがなかつたということになるであろう。つまり、清朝考證學的詩經學の學者が宋代詩經學の學說を引用するのは、詰まるところ個々の經說を全體からばらばらに切り離して利用したにすぎず、自身の詩經學の本質を構成する不可缺の要素として導入したわけではないということになるだろう。

しかしながら、筆者は以前、『詩毛氏傳疏』の中に、歐陽脩『詩本義』からの學的影響が濃厚に見出せることを論じた¹²⁾。また、郭全芝氏は同じく『詩毛氏傳疏』における朱熹『集傳』の影響を明らかにしている¹³⁾。毛傳獨尊を標榜した陳奐の詩經研究においてすら歐陽脩と朱熹の學問の影響が認められる以上、宋代詩經學を單純に清朝考證學的詩經學の對立項、まったくの他者としてのみ捉えることはできない。また、このような見方によっては、戴震から彼の再傳の弟子陳奐に至る清朝考證學的詩經學の學問的形成的實像も捉えられないのではなからうか。

戴震にとって宋代詩經學は、はたしてどのような存在であつたのであろうか。

一、戴震詩經學にとって、宋代詩經學はいかなる内實を持つものであつたのだろうか。本當に程朱理學の埒内に収まるものであつたのか。それを超える範圍と深度を持つものであつたか。

二、宋代詩經學の影響は、どの程度のタイムスパンで捉えるべきであろうか。楊應芹氏の言うように、戴震詩經學の初期における時限的なものであり、後に超越されたのであるうか。あるいは、時期的な限定を越え、彼の生涯に亘る詩經學の構成要素として持續的に揺るぎない地位を保ち続けたのであろうか。

この問題を考えるための鍵は『考正』にある。『考正』は、『補傳』と密接な関係を持って成立しながら、宋代詩經學からの引用が非常に少ないという點で『補傳』と對照的である。このような著述に視點を据えることで、戴震の詩經學における宋代詩經學の本質的な意義が浮かび上がるだろうことが期待できる。

本稿は、このような見通しのもと、『考正』における宋代詩經學の著述からの引用のあり方を考察したい。清朝考證學のとりわけ方法論の確立に功のあつた戴震という學者の詩經學の構想中で、漢代詩經學と宋代詩經學がそれぞれのような役割を擔わされているかを探ることは、清朝考證學の學術史の中でしばしば用いられる「漢宋兼采」という概念が、いかなる内實と多様性を有していたのかという問題を考えるための基礎固めに寄與するであろう。また、戴震という、陳奐の詩經學を導く水脈の源流の部分において宋代詩經學との関係を考察することは、歐陽脩と陳奐との比較から導き出した宋代詩經學と清朝考證學的詩經學との関係についての假説を、より具體的に檢證していく試みでもある。

2 『毛鄭詩考正』と『杲溪詩經補注』の著述時期の関係

本論に移る前に、『補傳』『考正』『杲注』の著述の前後について、どのような認識のもとに考察を進めるかについて整理したい。

戴震の詩經注釋書三種の中で、新發見の『補傳』が最も早く、戴震の若年の折に成立したということに關しては研究者の間で異論はない¹⁴。それに對して、『考正』と『杲注』の著述の前後關係、および『杲注』の著述時期については、現在のところ複数の説が行われている。

戴維氏の『詩經研究史』は、『杲注』が『考正』に先だつて著わされたとする。氏は、『杲注』の體例が「毛詩補傳序」で説明されているところとよく合致することから、『杲注』がすなわち『毛詩補傳』であり、この序の記年「乾隆癸酉」すなわち乾隆十八年（一七五三）までに著わされたと考えられ、一方『考正』は「詩比義述序」に未完成の『詩補傳』（氏に據ればすなわち『杲注』）から辯證を抽出して一秩となしたと言う著述に比定されると述べる¹⁵。ただし、我々は戴維氏の著書が、「戴氏經考」の外題を持つ書物（すなわち今日『補傳』と稱される書物）が発見・刊行されるより前であるか、あるいは目睹するに間に合わなかつた時期に執筆されたものであるということに注意する必要がある。『杲注』の體例が「毛詩補傳序」とよく合致していることを根據に『杲注』＝『毛詩補傳』とした戴維氏の説は、『杲注』と體例を同じくする『戴氏經考』が発見されたことよつて成立しなくなつてしまつた。『戴氏經考』卷首には、『東原文集』所収のそれと若干文字の異同を含みつつもほとんど同文の序文が載る。さらに、「毛詩補傳序」は、「今全詩に就き其の字義名物を各章の下に考へ」と言うが、これは二南二五篇のみの注釋である『杲注』には當てはまらず、詩經全篇の注釋である『戴氏經考』に合致する。したがつて、この序が與えられるべき書物としては『戴氏經考』こそがいつそうふさわしく、もはや『杲注』のために書かれたとは主張できなくなつたのであり、この序を『杲注』と『考正』の前後關係を考える根據にすることもできなくなつたのである。洪湛侯氏は、『考正』との前後關係については觸れないが、『杲注』の考證の特徴という内部的根據を擧げて、『杲注』が戴震若年の作であると言う。

『杲注』中、「兔置」「草蟲」「小星」諸篇では、毛傳・鄭箋と比較した後、はつきりと『集傳』の説が正しい」と言明している。これは、當時、漢學を主とする者は必ず宋學を攻撃し、宋學を主とする者は必ず漢學を攻撃する（主漢者必攻宋、主宋者必攻漢²¹）という門戸の争いを繰り広げていたのとは、確然と態度を異にしている。とは言え、ここにはやはり「漢宋兼采」の痕跡を認めざるを得ない。本書は、戴震の早期の作品とすべきである²²。

洪湛侯氏が、『杲注』で朱熹『集傳』の説が毛傳・鄭箋と同等に考察されていることを、漢學・宋學の門戸の見に囚われぬ實事求是の態度とするのは、前節で引用した陳海燕氏と同じ認識である。その一方で、これが「漢宋兼采」という學術的に未熟な状態が残存したもので、故に『杲注』が戴震若年の作である證據であると考えるのは、前節で引用した楊應芹氏の評價と同じ論理である。つまり、『杲注』が宋代の説を参照することに對する氏の評價には矛盾が見られる。この矛盾は、個々の經説を吟味することなしに、「漢宋兼采」という現象それ自體を學術史的定位の指標としたところに起因している。「漢宋兼采」のこのような捉え方が適當か否かは檢證が必要であり、それなしには本説にはにわかに依據し難い。

戴・洪兩氏は「杲注」が戴震の若年の著述と考えるが、他方、楊應芹氏・程嫩生氏等²³は「考正」が「杲注」に先立ち、『杲注』は戴震の學術的成熟期の著述であるという立場に立つ。「詩比義述序」に「震『詩補傳』を爲りて未だ成らず、別に書内の辨證を録して一秩を成す」と言うのを『考正』に比定し、そこから『考正』の成書は、『補傳』からそれほどかけ離れない時期と考え、一方、段玉裁「戴東原先生年譜」²⁴が『杲注』の著述を乾隆三二年（一七六六）、戴震四四歳に繋けているのよって、『考正』以後の作と考えるのである。

『戴氏經考』Ⅱ『補傳』の發見によって「毛詩補傳序」が『杲注』のために書かれたものではないことが明らかになったということは、『杲注』の著述時期が現時點では確定できないという結論が得られたに止まり、『杲注』が『考正』の前に書かれたという可能性までを完全に否定するものではないことは注意しなければならない。『考正』が『杲注』に先立つとする説の根據とされているのは、段玉裁による年譜の記事という第三者の證言であり、間接的な證據に止まっている。その意味では、現時點では二書の前後關係が決着に至ったというわけではない。

しかし別の見方をすれば、段玉裁による『杲注』の繫年を積極的に否定する材料もまたなく、このような狀況下では戴震に親炙した弟子である段玉裁の發言であるということが、相應の信賴性を擔保しているとも言うこともできる。したがって、新たな證據が出現するまでは、あくまで留保條件付きであるという意識を持ちながらも、『考正』が『杲注』に先立つという假説のもとに考證を進めるのが妥當であろう。本稿ではひとまずこれに基づいて考證を行うこととする。今後、我々は三書の經說を比較しながら吟味し、前後關係を蓋然的に示唆する内在的證據を發見し積み上げていくことが必要となる⁽²⁸⁾う。

3 『毛詩補傳』と『毛鄭詩考正』に見られる宋代以降の學者の説の引用狀況

程嫩生氏は、『考正』における朱熹『詩集傳』からの引用狀況について、次のように指摘する。

もし、『考正』を細かに檢證したならば、戴震はわずかに周頌「天作」の中で朱熹の説解を引用するのみであり、しかもそれは朱説を批判材料として引用したものである。……實際のところ、『考正』における朱熹の

地位は、顧炎武・閻若璩といった清代の學者に及ばない。確かに『考正』における顧炎武・閻若璩の説解の出
 現回数は多くはない（顧三例・閻二例）けれども、戴震は彼らの説に對しては肯定的な評價を與えている。^②

『毛詩補傳序』の中で「詩經を研究した先儒の中で、漢の毛公・鄭玄、宋の朱子より明快なものはいない（先儒
 爲詩者、莫明於漢之毛鄭、宋之朱子）」と言うように、詩經學の最高の成果の一つと認めていた『詩集傳』にして、
 『考正』中にただ一箇所しか参照されていない、しかもそれすら批判の對象として用いているにすぎないとすれば、
 他の宋代の學者の經説は言うに及ばない、この時期の戴震はすでに宋代詩經學を全く眼中に入れていなかったとい
 う結論が自然に導かれるようにも思われる。しかし、事實ははたしてどうだろうか。

戴震の詩經三注釋において、宋代以降の詩經學者の説ははたしてどれほど引用されているかを調べたのが附表1
 である。これに據ると、『考正』が取り上げる一一八篇の詩篇中、一二篇において宋代以後の學者の説からの引用
 が見られる。引用されるのは合わせて一五家、内譯は趙子常がいつの人であるのか不明であるのを除き、宋代一〇
 家・元一家・清三家となる（附表3参照）。朱熹『集傳』の説の明示的な引用は、程嫩生氏の言う通り一例のみに
 止まっている。

これを、『補傳』の、詩經全篇のうち宋代以後の學者の説が引用される詩篇二二一篇（附表1参照）、學者數合わ
 せて六八家（宋代三四家・元六家・明二〇家・清四家・朝代不明四家。附表2参照）と比較したならば明らかに少
 ない。とりわけ、『補傳』では一四八首の詩篇の解釋に引用されていた朱熹が『考正』では一例しか見られないこ
 と、『考正』の中で取り上げられている篇数が最も多い國風において宋代以降の學者の説が二首の詩篇しか引用さ
 れていないこと、『補傳』においては二〇家引用されていた明代詩經學が『考正』では全く見えないこと、宋元の

學者數の減少率と比較して清朝の學者數が大きく變化していないことなどを見ると、著述の規模の差を勘案しても、『考正』執筆時の戴震に宋元明の詩經學の引用を避けようという意圖があったことは確實であると思われる。しかし、たとえ著述の意圖がそうであったとしても、これをもってただちに當時の戴震の宋代詩經學に對する評價が低下していたことを表すと結論づけられるであろうか。あるいは、かりに戴震の主觀的な評價がそうであったとしても、はたして彼が本當に宋代詩經學の影響から脱却し得たことを表すと結論づけられるだろうか。

『考正』において宋代詩經學からの引用が少ないことは事實であるが、しかし、少ないながらも一定數存在しているのである。我々はこのことをこそ重視しなければならぬのではなからうか。元の學者はわずか一家、明に至っては無しとなった（朝代不明一家はしばらく措く）のに比べれば、一〇家の引用がある宋代詩經學はむしろ戴震によって重視されている、あるいは戴震に對して強固な影響力を保持していることとさえできるのではないだろうか。

附表3を見ると、『考正』に引用される宋代の學者は數こそ少ないが、『七經小記』で宋代詩經學の幕を開いた劉敞、漢唐詩經學に大膽な異議申し立てを行い斬新な方法論を提示し新時代の詩經學の地平を一舉に切り拓いた歐陽脩から、新學によって一世を風靡した王安石、理學の先導者程頤、朱熹と鼎立して南宋詩經學を代表する呂祖謙・嚴粲、兩宋の學術の掉尾を飾る王應麟と、宋代詩經學の全史を覆うと言つてよいほど時間的にも内容的にも擴がりを持つ顔ぶれが並んでいる。明らかに戴震にとつての宋代詩經學は、朱熹『詩集傳』一書に限定されるものではなく、また理學の影響という要因のみで説明できるものでもない。

ならばむしろ、『考正』において戴震は漢唐詩經學および彼の同時代の學問を尊重し、宋・元・明を研究の視野から意識的に外したと見えるにも拘わらず、それでもなお宋代の學者の經說を一定數参照しているのはいったいな

ぜなのかという問題提起をこそすべきではないだろうか。

『補傳』と『考正』の宋代以後の經說の引用状況を比較して、さらに注目すべきことがある。それは、兩者間において同一詩篇の中で同じ經說が明示的に引用されているのは一例のみで、他はすべて異なっているという事實である。つまり、『考正』には『補傳』に引用されていない宋代以後の學者の說が新たに引用されているのである。

これは、戴震が『考正』執筆の段階に至っても、なお宋代以降の學者の著述を参照し利用し続けていたことを表す。宋代以降の詩經學の成果は、依據の對象としてであれ批判の對象としてであれ、無視すべからざる存在感を變わることなく持っていたのである。

『考正』の詩篇解釋の中で、宋人の詩經學の說はどのような意義を持つているであろうか。この問題を解明するためには、宋代の經說という大まかな括りのもとに考えるのではなく、個別の引用例を取り上げてそれぞれの意義を分析するところから考察を開始しなければならない。

なお、附表1に據れば、『杲注』に収める二南二五篇の注釋において宋儒の說の引用は二〇首三七例にのぼる。これを『考正』の同じ範圍において宋儒の說の引用が一例のみしかないと竝べると、第2節で述べた『考正』の成立が『杲注』に先立つという筆者の見解は、『考正』の段階では『補傳』において積極的に行っていた宋儒の引用を意識的に避けその影響からの脱却を意圖していたのに、『杲注』においてはむしろ宋儒尊重の姿勢に復歸したという結論を引き出しているようにも見えらる。しかし、そう結論するのは早計である。

『杲注』で引用されているのは壓倒的に朱熹『詩集傳』が多く、それ以外の宋儒の引用は四例のみである。朱熹說の大量の引用の理由を考えるには、戴震當時『詩集傳』が有していた特權的な地位——科擧における標準テキストとして朝廷からのお墨付きを得、知識人の詩經解釋に絶大な影響力を發揮していた——を考慮に入れる必要があ

る。戴震が従来の詩經學とは一線を劃する自身の詩經研究を首尾整った體例のもとで示そうとする時、毛傳・鄭箋と並ぶ權威的かつ傳統的な注釋であった『詩集傳』に示された説に對する評價は、繼承批判の別なく議論の出発點として必ず行わなければならないかつ手續きだったことが想像できる。本稿においてはその内實を精しく検討することはできないが、朱熹説の引用は他の宋儒の説の引用とは別個の問題として獨自に考えるべきである。

さらに、朱熹以外の宋儒の説の内、薛士龍・金履祥の説の引用が詩篇の全體的意味を論じる篇義においてなされていることも注意しなければならない。『考正』が基本的に詩篇の文字や語句についての考證を列舉し一篇の趣旨についての考察は行わない著述であることを考えれば、この二者の引用の有無は『考正』『杲注』兩者の著述方針の違いによるものと整理することができる。以上のように考えれば、『考正』と眞に同列において考えられる宋儒の引用は二例ということになり、『考正』と大差ないことになる。したがって、『杲注』が宋代詩經學重視の態度に立ち戻ったと即斷することはできない。

4 出典を明示しつつ引用される宋儒の説

『考正』に引用される宋人のうち、特に目に付くのが程頤と王安石である。兩者はそれぞれ二首の詩篇に引用されている（程頤の詩説は二首の詩篇につき合計三例）。王安石『詩經新義』と程頤「詩説」という二つの詩經注釋は、宋代詩經學の構築において大きな役割を果たしたものの、後には特異な研究としてあまり顧みられることがなくなつたものである。これが宋代詩經學からの影響を排したとも言われる『考正』の中に見られることは、注目すべき事柄であり、戴震が構想した詩經研究の全體像を考察する上で、無視することのできない論點を提供すると期

待てきる。

まず、程頤の詩篇解釋が引用されている例を検討しよう。

4—① 小雅「常棣」首章

常棣之華 常棣の華

鄂不韡韡 鄂不うてな韡韡いたり

〔箋〕花弁を承けるのが鄂（萼）である。「不」は、「拊」に作るのが正しい。「拊」は、萼の付け根である。萼の付け根は花びらの輝きを受けて、まぶしくみごとに輝く。興するのは、弟は尊敬の心を持って兄に仕え、兄は榮譽によって弟に恩恵を施す。恩義の輝かしいこともまたきらびやかである。古は「不」「拊」は音が同じであった（承華者曰鄂。不、當作拊。拊、鄂足也。鄂足得華之光明、則韡韡然盛。興者喻弟以敬事兄、兄以榮覆弟、恩義之顯、亦韡韡然。古聲不拊同）

〔考正〕程氏は次のように言う、常棣の花弁と萼とは非常にしっかりと繋がっている。だから、それによって兄弟を興したのである（程子云、常棣華萼相承甚力。故以興兄弟）

〔考正〕は、「常棣」の興句が本詩のテーマである「兄弟睦み合う」こととどのように関係しているかを説明する。〔補傳〕では、「鄂不」の「不」が「拊」に通じることを説明するのみであり、右の『考正』の説に對應する考證は

ない。したがって、語句解釋に止まらず、興句の意圖に考察を及ぼすことは、『考正』執筆の段階においてはじめて行われたと判斷することができる。そこで程頤の説が引用されているのである。

鄭箋と程頤の説とを比較すると、鄭箋では常棣の花の美しさのおかげで萼までがきらめいて見えるところに着目し、兄と弟が恩愛によってお互いに榮える様を興すると捉えられているのに對し、程頤の説では常棣の花瓣と萼とがしっかりと結びついているところに着目し、兄弟が切つても切り離せない強固な關係で結びついている様を興すると捉えられている。程頤の説は本詩第四章、

兄弟鬩于牆 兄弟 牆かきに鬩せめげども

外禦其務 外には其あなじの務かりを禦かぐ

および第五章、

喪亂既平 喪亂 既に平らぎぬ

既安且寧 既に安んじて且また寧やすし

雖有兄弟 兄弟有りと雖も

不如友生 友生に如かず

で歌われている、兄弟は平常時には疎遠で仲が悪かったとしても、いざ事が起こった時には、いがみ合いを忘れて

苦難を乗り切るためにお互い助け合うものであるという内容に相應しい興となっている。それと比べると、鄭玄の解釋では興句と詩篇全體との繋がりが稀薄である。これから考えると、戴震は詩篇全體の中の位置付けという視点から興句がより適切なものになるにはどのように解釋すればよいか吟味し續けて、『考正』の段階で程頤の解釋に行き着き採用したということになる。

4—② 豳風「破斧」

周公東征

四國是吡

〔二章〕

〔考正〕程氏は、「『吡』は動くという意味である。この四國が叛亂して震動しているのである」と言う（震按、程子云吡動也。爲是四國之亂振動）

周公東征

四國是適

〔卒章〕

〔考正〕『說文解字』に「適、迫なり」と言う。程氏は、「『吡』よりいっそう状況が切迫している」と言う（說文適迫也。程子云加切於吡）

『考正』は程頤の説に據つて、「四國が叛亂し蠢動している」「叛亂の動きが活發化している」と解釋している²⁹。これに對して、『補傳』では、「毛傳』に、『吡は化すという意味である』とある（毛傳、吡化也）」と言うのみで程説は引かれていない。ここから、戴震が『補傳』の段階では基本的に漢唐の訓詁に從つていたのが、『考正』執筆に際して説を改め、程頤の解釋を採用したことがわかる。

戴震はなぜ解釋を變えたのであろうか。毛傳の説に據つた場合、この二句が詩篇全體の文脈の中でどのような位置付けられることになるのか、本詩三章を見渡しながらかえてみよう（毛傳の訓詁に基づいた詩句の書き下しを附す）。

四國是皇　四國を是れ皇す^な

〔傳〕「皇」は、匡正するという意味である（皇、匡也）

〔正義〕周公が東征した目的は、ただ、その四國の君主を誅伐するためだけであつた。匡正するのは四國の人民である。これは、四國の人民は唆されて亂を起こしただけを主たる理由とし、周公はその罪を問うことはせず、彼らを正しく導いたのである（周公所以東征者、是止誅其四國之君、正是四國之民。主爲四國之民被誘作亂、周公不以爲罪而正之）

〔首章〕

四國是吡　四國を是れ吡す

〔傳〕「吡」は、徳化するという意味である（吡、化也）

〔二章〕

四國是適 四國を是れ適かたくす

〔傳〕「適」は、堅固にするという意味である（適、固也）

〔正義〕言わんとしているのは、四國の人民の心を堅固にさせたということである（言使四國之民心堅固也）

〔卒章〕

毛傳の訓詁では、三章は周公が四國の人民の罪を問わず、匡正し教化し安定させたことを歌っていると捉えられている。「皇」「叱」「適」、ほぼ類似した意味で、三章の中で事態の變化發展はそれほど見られない。本詩の『正義』が、首章のみ詳しい疏通を行い、二章・卒章には必要最小限の説明を加えるのみであるのも、疏家が本詩三章を単純な疊詠と認識していたことを表す。『補傳』段階の戴震の解釋も同様であったと考えられる。

一方、『考正』では本詩首章について次のように言う。

本詩の詩句に込められた意味としては、「皇」は「皇遽（慌てふためく）」の「皇」の意味でとるべきである。四國のために、「天下の人々が——筆者補記）慌てふためいて平穩さを失ったと言っているのである。だから、下の句で「我が人を哀れむ」と言っているのである（詩之辭意皇當爲皇遽之皇。言以四國之故、皇遽不寧。故下云、哀我人斯）

これを含めて、『考正』の説に據って本詩全篇の流れをまとめると次のようになる。

四國是皇 四國は是れ^{おしろのみま}皇^{あは}てしむ

四國是叱 四國は是れ叱^うく

四國是適 四國は是れ^{せま}適^る

四國の振る舞いが天下を恐慌と不安に陥れ、四國が叛亂を勃發させ、その動きをますます活発化させていくという流れが見られ、叛亂によって天下の混乱の度が次第に増していく様子が詠われていることになる。毛傳・正義および『補傳』が單純な疊詠として本詩を捉えるのに對して、『考正』では各章ごとに事態が變化進展しているという認識が見られる。これは漸層法による解釋である。『補傳』から『考正』にかけての字句の解釋の變化は、單純な疊詠から漸層法へと詩篇全體の把握の仕方を轉換させたことを反映したものであり、このような認識の變化を導いたのが程頤の解釋ということになる。

戴震は單純に程頤の解釋を鵜呑みにし敷き寫したわけではないということにも注意しなければならない。戴震の「皇」の字の解釋は程頤とは異なっている。本詩首章について「程說」に次のように言う。

商・奄ははじめに管・蔡を率いて周公を陥れる流言をし、とうとうそれにかこつけて叛亂を起こし、天下をますます動亂させ、周王朝の功業を傷つけ損ねようとした。その悪行は日に日にいや増し、速やかに誅伐しなければならなかった。周公が東征した目的は、四國を正そうと考えたからである（注）「皇」は、『爾雅』「釋言」に、「匡は正なり」と言う（商奄始率管蔡爲流言、遂以叛、將益動天下、以傷懷王業、惡日以滋、當速誅也。周公所以東征、四國是皇也（皇、釋言、匡正也））

程頤の「皇」の解釋は毛傳の訓詁を踏襲したものである。これによると、首章では周公の東征の動機が説明されているのに對して、二章・卒章では四國の謀叛によつて混亂が増していく様子が歌われているということになり、同様の形を持つ詩句でありながら首章と他二章とで歌われている視點が異なってしまうことになる。ここから考えると、戴震が「皇」について新たな解釋を提示したのは、四國の叛亂によつて天下が次第に混亂していく有様が歌われているという觀點で全章の解釋を一貫させるためであつたと考えることができる。つまり、戴震は敘述の視點の一貫性を追求するために首章の解釋については程説に従わなかつたのであるが、これは見方を變えたと程頤によつて提示された新しい解釋の方向性をより徹底させるためであつたと捉えることができる。

次に、王安石の詩篇解釋が引用されている例を検討しよう。

4—③ 小雅「四月」二章

秋日淒淒	秋日	淒淒たり
百卉具腓	百卉	具な腓みぬ
亂離瘼矣	亂ありて離	へ瘼む
爰其適歸	爰 <small>いづ</small> くにか其れ適 <small>ゆ</small> き歸 <small>き</small> せん	〔杜預説に據る〕／爰 <small>こゝ</small> に其れ適 <small>ゆ</small> き歸 <small>かえ</small> らん〔王安石説に據る〕

〔考正〕『春秋左氏傳』宣公十二年にこの詩が引かれて、その杜預の注に、『爰』は、『於』の意味である。『禍亂』憂病はいづくに歸するのだろうかということを行っているのである』と云うが、これはまだこの語の意味を

充分に捉えていない。王安石、字は介甫は次のように言う、「亂は上から發生するが、禍を受けるのは常に下の方だ。それが極點に至ると、ようやく亂は生まれた所に向かつて歸つていく」と言う⁽³²⁾（春秋宣十二年傳引此詩。杜注云、爰於也。言禍亂憂病於何所歸乎。此猶未得語意。王介甫云、亂出乎上而受患常在下。及其極也、乃適歸乎其所出矣）

『補傳』には王安石の説の引用はなく、『考正』も引く『春秋左氏傳』杜預注が引かれていることから、杜預の「禍亂憂病何くの所にか歸せん」という解釋に従っていることがわかる⁽³⁴⁾。一方、『考正』では杜預の解釋に飽き足りず、王安石の説を参照したことになる。これも戴震が『考正』執筆段階においても、解釋をよりよいものにするために宋人の説を涉獵していたことを表す。

杜預の解釋では「爰其適歸」の句を「禍はこの先どこに向かうのであろうか」と疑問文として読み、詩人が行き場のない絶望感を疑問に託したものとして捉えている。一方、王安石は「禍は爲政者の不徳によって引き起こされ、その被害は庶民に降りかかる。しかし、さらに事態が深刻さを増すと、今度は禍が生み出された源、すなわち爲政者のもとに歸つて害悪を與えるものである」と、詩人が訓戒の言を述べた句として解釋されている⁽³⁵⁾。この場合は本句は疑問ではなく、「爰に其れ適き歸らん」と讀むのであろう。この解釋では、不徳な爲政者が天下の人々を不幸に陥れたあげくの果てに自らも報いを受けて非業に倒れることになる、杜預の説に比べてより明確な政治的警告が發せられていることになり、「刺」詩としての性格がいつそう強化されている。したがって、戴震は詩經の教化の役割を重視して、杜預の解釋から王安石の解釋へ移行したということになる。言い換えれば『補傳』から『考正』にかけて戴震は、詩人の作詩の政治的・道徳的意圖をより強く意識して解釋するようになったと言うことがで

き
る。

本節で取り上げた三例は、いずれも『補傳』から『考正』の間に解釋の變化があり、それを生み出す契機になったのが宋代詩經學の成果であった。戴震が詩經研究に当たったためまぬ再檢討を行っていた様子がわかるとともに、『考正』の研究段階でも詩篇の本義により迫るための不可缺の資料として宋代詩經學が参照されていたことがわかる。

5 出典を明示せずに解釋に組み込まれている宋儒の説

『考正』で、學者名を明示しながら引用されている宋代詩經學の經説は十五例であるが、實は『考正』が引用する宋代の經説はこれのみに止まらない。宋代の學者の立てた説でありながら、學者名・書名を示さずに『考正』に引用していると考えられる例が複数見られるからである。本節ではそのいくつかを検討してみたい。

5—① 周南「關雎」首章

關關雎鳩 關關たる雎鳩

在河之洲 河の洲に在り

〔傳〕興なり……雎鳩は王雎なり。鳥の摯にして別有るなり（興也……雎鳩、王雎也。鳥摯而有別）

〔箋〕「摯」の意味は「至る」ということである。王雎^{ミサコ}という鳥は、雌雄の愛情が至って深い。しかしながら雌

雄の別を守って〔離れて暮らして〕いる（摯之言至也。謂王雉之鳥、雌雄情意至。然而有別）

〔考正〕後の學者もまた、獐猛で猛々しい雉鳩のような鳥は、淑女を興するには相應しくないと疑いを持つ者が多かった。考えるに、詩篇の中の比興は、例えば〔周南「螽斯」で〕螽斯^{イナゴ}を、ただその子孫が多いという特徴に目をつけて比喩に用いたり、〔本詩で〕雉鳩の和やかに鳴き交わすという点と雌雄の別を守るという点に目をつけて比喩に用いたりしており、その蟲として鳥としてどんな種類のものであるのかということには必ずしも拘泥しないのである（後儒亦多有疑猛鷲之物、不可以興淑女者。考詩中比興如螽斯但取於眾多、雉鳩取於和鳴及有別。皆不必泥其物類也）

戴震の説明は、比喩と比喩されるものとの間の不均衡という問題を解決しようとしたものである。「關雉」の詩で獐猛な雉鳩を婦徳の比喩として用いていることに對しては、古來違和感を抱く者が多かった。特に毛傳が雉鳩を「摯にして別有り」と、その獐猛性を明示したように見える「摯」の字を用いた訓釋をしたことでこの問題が表面化した。この違和感を拂拭するために、鄭玄は「摯」は獐猛という意味ではなく、「至」——情愛が至って深い——の音通であるとし、道徳的に問題のない説明に轉換しようとした。戴震は古籍の用例に基づいて鄭玄のような訓詁上の操作は成り立たないことを示した上で、雉鳩は確かに獐猛な鳥だが、詩人はその獐猛さを問題にせず、そのもう一つの屬性である、雌雄が別れて暮らすという点に目をつけ、それを夫婦の別を守るとして徳性の比喩として用いたのであると説明する。比喩に用いる事物と比喩しようとするものとは全的に對應している必要はなく、その一部が對應していさえすれば比喩として成立するという認識である。

この問題については、『補傳』『杲注』にも同様の説があり、戴震の詩經研究で終始一貫した認識であったことがわかる。

〔補傳〕本詩はただ和やかに鳴き交わすという點を興として用いたのであり、雉鳩がいかなる鳥なのかということには拘っていない（詩但興於和鳴、不必泥其物類也）

〔杲注〕雉鳩が雌雄の別を守るといふのは、その本性によってそうなっているのである。だから、詩人はそこに比喩としての意圖を寄せたのである。およそ、詩篇の言葉で事物を用いる時には、その屬性の一端のみを取り、その事物がいかなる種類のものなのかということには必ずしも拘らない（雉鳩之有別、本於其性成。是以詩寄意焉。凡詩辭於物、但取一端、不必泥其類）

なお、『考正』で雉鳩と並んで例として出している「螽斯」についても、『補傳』に次のように言い、やはり比喩認識が一貫している。^{③④}

〔螽斯〕の詩では、イナゴが子孫が多いという點を興に用いているのであり、イナゴという蟲がどのようなものであるか（イナゴのようなつまらぬ蟲を高貴な人々の子孫を褒め稱える詩の比喩として用いてよいのか）ということには拘らないのである（詩興於螽之眾多、不泥其物類也）

しかし、このような比喻認識、および「雉鳩」「螽斯」の解釋は、戴震獨自のものではない。『詩本義』「關雉」論に次のように言う。⁽⁴⁾

「詩人は本來、后妃の淑善の美德を歌っているというのに、かえって獐猛な鳥を比喻に用いるというのはおかしいではないか」と言う人があれば、それに對して私は「詩人は雉鳩の獐猛な性質を無視して、ただその雌雄の別れて暮らすところにのみ注目したのである。雉鳩が河の中洲にいて、その聲を聽けばなごやかで、その様子を見れば雌雄別れて暮らしている、これが詩人が比喻として用いたものである」と答えよう（或曰、詩人本述后妃淑善之德、反以猛摯之物比之、豈不戾哉。對曰、不取其摯、取其別也。雉鳩之在河洲、聽其聲則和、視其居則有別、此詩人之所取也）

『詩本義』「螽斯」論にも次のように言う。

イナゴは子供をたくさん産む蟲である。おおよそ蟲というのはみな子供が多いが、詩人はたまたまその一つを取って比喻に用いたまでである。比喻しているのはただ、后妃がイナゴのように子たくさんなのであるという點を捉えただけである（螿螽多子之蟲也。大率蟲子皆多、詩人偶取其一以爲比爾。所比者但取其多子似螽斯也）

戴震の比喻認識の淵源が歐陽脩にあることは明白である。⁽⁴⁾

5—② 大雅「皇矣」首章

維此二國 維れ此の二國

其政不獲 其の政 獲ず

維彼四國 維れ彼の四國

爰究爰度 爰ここに究はかり爰ここに度はかる

上帝耆之 上帝 之を耆にくむ（毛傳に據る）／上帝 之を耆おほいしむ（鄭箋に據る）

憎其式郭 其の式もつて郭おほいなるを憎にくむ

「傳」「耆」は悪むという意味である。「廓」は大きいという意味である。彼らが大きい位に據って、大いなる政を行っているのを憎むのである（耆、悪也。廓、大也。憎其所用大位、行大政）

「箋」「耆」は老いるという意味である。天はしばらくの間この二國（鄭玄説では、殷の紂王と崇侯——筆者補記）に力を貸し、彼らが年老いるまで養ったが、なお行いを改めようとしなかったため、彼らが悪行をなす

やり方が次第に大がかりになっていくのを憎んだ（耆、老也。天須假此二國、養之至老、猶不變改、憎其所用爲惡者浸大也）

「考正」また、四方の諸國(43)を測り見るのは、天が周を依怙(44)鼻肩(45)にしているわけではないことを明らかにしたのである。かりに、天の意志が屬するところに應じたならば、その國境を擴大しないということはない（又究度四

方之國者、明天非私於有周。苟足以膺天意所屬、則莫不增廣其疆限)

「憎其式郭」の「憎」の字を戴震は「増す」の意味で解釋している。文王が天意に従って周邊の地を收め、周の國土を擴張したとるのである。『考正』ではこの字釋の基づくところを示していないが、『補傳』に次のようにある。

程子は次のように言う。「式郭」は「規限」を言う。ちようど規模範圍というようなものである。「憎」の字は「増」と同じである。……ということとは、周が人民を安定させることができたのは、天の意志が周にあったということである。さらに、彼の四方の國を測り見るといのは、天が周に依怙鼻肩をしているわけではないことを明らかにしたものである。假に上帝の意志に充分見合うものがいたならば、その國境を擴大しないというのではない……「耆」は「指」と同じ發音である。『釋名』に、「耆は指なり」と言う。音義がもとと相通じているのである。「上帝 之を耆す」とは、ちようど「天意の屬する所なり」というのと同じである（程子曰、式郭謂規限也。猶言規模範圍也。憎字與增同。……然則、周能安定斯民、天意當在周矣。又究度彼四方之國者、明天非私於有周。苟足以當上帝之意者、則莫不增廣其疆域……耆讀若指、釋名云、耆指也。聲義本相通。上帝耆之、猶言天意所屬）

これを見ると、「憎」の訓釋が戴震の創見ではなく、程頤の説を踏襲したものであることがわかる。程頤・戴震の解釋によって末二句を訓讀すると以下のようになる。

上帝者之 上帝 之を著せば
憎其式郭 其の式郭を憎す

以前考察したように、「憎」を「増」に通ずとする程頤の説は朱熹に受け継がれた。⁴⁴ 本例が程頤——朱熹という継承関係を持つ説であることを勘案すると、朱熹の説を参照した例は、先に見た明示的な引用一例に留まらないとも言えることになる。

ところで、程頤は本詩について「詩説」の中で次のように言う。

「憎」の字は「増」と同じである。憎めば心に限度を超えるところがある。だから、その字義は「増」と通じるのである（著致也。頤云著定爾功。上帝者之、謂天命所歸。……憎字與増同、憎心有所超也。義與増通矣）

これを『補傳』における引用と比べると、戴震は程頤の説の結論部分を引用するのみで、根拠を説明した部分は無視していることがわかる。遑つて朱熹も、「或いは曰く、『憎は當に憎に作るべし』と結論を導く根拠を變え、傳寫の誤りとして處理している。これについて筆者は前稿で、「朱熹はおそらくは程頤の論理に無理を感じたためである⁴⁵」と推測したが、これはおそらく『補傳』の引用の仕方をも説明するであろう。また、朱熹が『集傳』で本説を「或ひと曰く」と言つて程頤からの引用であると明示しなかったように、戴震も『考正』で出典である程頤の名を示さなかったことの理由もここに求められるかもしれない。⁴⁶ しかし別の見方をすれば、戴震は程頤の解釋が學問的方法論上の説得力に乏しいことを知りながら、あえてそれに目をつぶつて引用したことになる。彼にとつて

程頤の説はそれほど魅力あるものだったということになる。

5—③ 小雅「北山」二章

大夫不均 大夫 均しからず

我従事獨賢 我 事に従ひて獨り賢つかれたり〔毛傳に據る〕／獨り賢かしし〔鄭箋に據る〕

〔傳〕「賢」は疲勞するという意味である（賢勞也）

〔箋〕王は使いとしての仕事を大夫に均等に命じることなく、専ら私が賢才であるが故に、私だけを出役に就かせている。これは自分自身の苦勞を託つ言葉である（王不均大夫之使、而專以我有賢才之故、獨使我従事於役。自苦之辭）

「賢」の訓詁に關して、毛傳と鄭箋は説を異にしている。毛傳に據れば本句の意味は、「私一人が使者としての事に従事して疲勞困憊している」となり、鄭箋に據れば、「私がこうして使者としての仕事に追われているのは、私だけが賢なる才能の持ち主だからだ」という意味になる。戴震はこの兩説とも否定する。『考正』に次のように言う。

「賢」の本義は「多い」である。「貝」に従い「叀」の聲である。本例と、投壺（『禮記』『投壺』）と射（『儀禮』『大射』『若右勝則曰右賢於左……以純數告』鄭注）の禮において「某は某より賢おほきこと若干純」と言うの

とは、いずれも「賢」の本義を用いている。孟子が本詩を解説して、「此 王事に非ざること莫し。我獨り賢勞たり」と言う（『孟子』「萬章上」）のは、仕事に従事するのが自分一人多く、他人は樂をしているのに私は疲れているということである。本詩の四・五・六章で歌われている内容がこれに當たる。孟子が解説の中で「勞」の字を付け加えたのは、本詩で歌おうとしているのが、仕事に疲れ果てて父母の世話をすることができないということであるから、このように言ったのであり、「賢」の意味で解釋したものではない。鄭箋が「賢才」という意味で解釋したのはなおのこと誤っている。凡そ字には本義があり、それは偏旁に關連している。それに因んで應用され擴げられた意味はみな六書という假借である。「賢」は本來物の數を比べて多いことを指す字であつた。「多才」であるのを「賢」と言い、さらに専ら善行が多いことを「賢」と言うようになったことから、それに慣れ親しんで文字のそもそもの成り立ちが忘れられてしまったのである（賢之本義多也。從貝叀聲、此與禮投壺射某賢於某若干純之賢、皆用本義。孟子說此詩曰、此莫非王事、我獨賢勞也。謂從事獨多、人逸己勞、如詩之後三章所云是也。増成勞字、明作詩之志以勞不得養父母而爲此言。非以勞釋賢。箋就賢才說尤失之。凡字有本義屬乎偏旁。其因而推廣之義、皆六書之假借。賢本物數相校而多之名。因謂多才爲賢、又專謂多善行爲賢、由是習而忘乎作字之初矣）

戴震は、「賢」を「多い」の意味と取り、本句を「使者としての仕事に従事すること、私一人だけ多い」と解釋する。この説の原形は、『補傳』の段階ですでに存在している。

「賢」は「多い」という意味である。ちょうど、「某は某より賢なること若干純」の「賢」と同じである

〈注〉『孟子』に、「我 獨り賢勞たり」と言うのは、いわゆる苦勞する仕事かひとりだけ多いというものである（賢、多也。猶某賢於某若干純之賢〈注〉孟子、我獨賢勞、即所謂勞事獨多也）

ちなみに、戴震の弟子段玉裁も、戴震のこの訓釋を採用している。『說文解字注』六篇下、貝部「賢、多財也」に注して次のように言う。

「賢」はもともと財が多いことを稱する字である。そこから意味が發展して、凡そ多いことをすべて「賢」と言うようになった。人については多能であるのを「賢」と稱していたのだが、この引申義が一般的になったことが原因でその本義が廢れてしまったのである。「小雅」の「大夫 均しからず、我 事に従ふこと獨り賢なり」の毛傳に、「賢、勞なり」と言うのは、事が多くて疲勞することを言う。故に孟子はこれを説明して、「我獨り賢勞たり」と言った。戴震先生は、『投壺』に、『某は某より賢なること若干純』と言う「賢」は多いということである」とおっしゃった（賢本多財之稱。引伸之凡多皆曰賢。人稱賢能、因習其引伸之義而廢其本義矣。小雅、大夫不均、我從事獨賢。傳曰、賢勞也。謂事多而勞也。故孟子說之曰、我獨賢勞。戴先生曰、投壺、某賢於某若干純。賢多也）

『補傳』『考正』いずれにおいても、この説に出づるところがあるとは言っていない。段玉裁の書き方も、それが戴震の創見だと見なしているようである。しかし、「賢」を「多い」の意味と唱えたのは先例が存在する。王安石『新義』小雅「北山」に次のように言う。⁽⁴⁸⁾

取った数が多いのを「賢」という。『禮記』「投壺」に「某は某より賢なること若干なり」というのは、本詩と同じ意味である（取數多謂之賢。禮記曰、某賢於某若干、與此同義）

鄭元敏氏の考證に據れば、王安石の説は宋・呂祖謙『呂氏家塾讀詩記』、宋・楊簡『慈湖詩傳』、宋・段昌武『毛詩集解』、明・何楷『詩經世本古義』、明・朱朝永『讀詩略記』に引用されているが、附表2の「補傳」の引用書目から、戴震が少なくとも呂祖謙と何楷の著書を見ていたことは確かであるので、この兩書の中から王安石の説を見出し自身の詩經解釋に取り入れたと想定される。⁽⁵⁰⁾

戴震は、王安石が根據とした『禮記』「投壺」の用例を引いた上で、さらに『儀禮』「大射禮」鄭注を添え、「多い」が「賢」の本義であることを導き出している。「凡そ字に本義有りて偏旁に屬す」と言うところから考えると、おそらく「賢」が「貝」部に屬するところから、財産が多いというのが本義だと考えているのだろう。この認識に基づき、「賢い」「有徳である」という通用義が引申義であると、意味の發展變化の歴史の中に位置付け、結果的に本義の優位性を主張している。さらに、『孟子』の本詩を引いて「我獨り賢勞たり」と解説しているのが、一見毛傳の「賢は勞なり」の訓詁を支持するものと見えるのを、孟子も「賢」を「多い」という意味に理解しているのだが、その程度を説明するために「勞」の字を附加し、「疲勞困憊するほど過多である」と強調しているのであり、「勞」の字は「賢」の同義語として附加されたわけではない（すなわち、訓讀すれば「我獨り賢おほくして勞つかれたり」となる）と説明している。⁽⁵¹⁾ 戴震は王安石の字解を起點とし、王安石の説が持っていた孤證という弱點を考證學的手法を驅使して補強したと言いうことができる。⁽⁵²⁾

5—④ 小雅「伐木」卒章

有酒滑我 酒有らば我滑し

無酒酤我 酒無くんば我酤せん⁽⁵³⁾

〔傳〕「酤」は一晩醸した酒である（酤一宿酒也）

〔考正〕これは設言である。もし酒がなくなつたとしても私はなお急いで一夜酒を作るのであり、「酒がないから」と斷つたりはしない（此設言。若無酒則我猶卒爲一宿之酒、而不以無爲辭）

南宋・嚴粲『詩緝』に次のように言う。

故に、私は宴席の準備をする役人に次のように命じる、「酒があつたら私のためにその澱を濾しなさい。酒がなかつたら私のために買ってきなさい」と。本當に酒がないというわけではない。設言してもし酒がなかつたら買ってでも用意せよと言っているのである。朋友を大切に思うので、酒があるとかないとかを言い譯したりしないのである（故我命有司設燕者曰、有酒則爲我以茅茜之。無酒則爲我酤買之。非必無酒、設言縱使無酒猶當酤之。篤於朋友、不以有無爲辭也）

「酤」の訓詁は異なっているもの、⁵⁴「無酒酤我」の句を事實を述べたものではなく、假の事態を想定したものと捉え、それを「設言」と言う術語で説明する點は嚴粲と戴震とは共通している。このことから、戴震はこの句の解釋において嚴粲の説を参照していると考えられる。なお、この句を設言とする説は『補傳』には見られないところから、戴震は『考正』執筆時點において嚴粲の説を参照して解釋を改めたと考えられる。

以上の例からわかるように、『考正』の中には、出典を明示して引用する以外に、それと示さずに宋儒の説に従っているものがある。その數は、今後さらに詳しく調査をすることで増える可能性が高い。また、引用されている學者も、歐陽脩・王安石・程頤・嚴粲と北宋・南宋に跨がって多様性に富んでいる。

戴震が説の出典を明示しなかった理由は様々あるだろうが、それが宋代の學者によって唱えられて以降、複数の人々によって繼承され、戴震の時代までにある程度普及しており、あえて特定の個人に歸するの必要を感じなかったという理由も考えられる。5—②の「憎」の字釋が、程頤から朱熹に受け継がれていたのなどは、その一つの例となるであろう。このようなケースは、清朝の詩經學者にとって宋代詩經學の影響力は實は彼らが意識するよりずっと広い範圍を覆い、またより潜在的な部分にまで浸透していたことを暗示する。言い換えれば、戴震、あるいは清朝の詩經學者にとって先人の解釋は、それがどの時代の學者が唱えたものかという觀點で確然と區別し取捨できるようなものでなく、より渾然として眼前に廣がっていたということになるであろう。これから考えても、戴震詩經學における宋代詩經學の影響は低く見積もることができない。

6 『考正』における宋代詩經學の意義と利用の仕方

さらに、經説を直接的に引用するのではなく、宋儒の用いた解釋の方法論を學び取った上で戴震なりに應用した例も見出せる。

6—① 陳風「墓門」二章

墓門有梅 墓門に梅有り

有鴉萃止 鴉有りて萃るあつま

夫也不良 夫や良からず

歌以訊之 歌ひて以て訊ぐ

〔傳〕「鴉」は惡聲で鳴く鳥である（鴉惡聲之鳥）

〔箋〕梅の木は、それ自體の善し惡しを持つているのだが、ただフクロウがその上に集まって鳴くと、人はそれを憎み、梅の木までそのために憎まれる。それによって、陳佗の性格はもともとは必ずしも惡かったわけではないのに、その師傳が惡かったために、陳佗もそれに從つて惡くなつてしまったことを諭える（梅之樹、善惡自爾⑤、徒以鴉集其上而鳴、人則惡之、樹因惡矣。以喻陳佗之性本未必惡、師傳惡、而陳佗從之而惡）

鄭箋は、毛傳の訓詁により「鴉」をフクロウととり、その鳴き聲が不吉であることが興として用いられていると解釋するのに對して、『考正』は、「鴉」を鶻鳩イカルのこととした上で次のように言う。

本詩は「イカルが集まって鳴く」聲が多いということによって、歌つて主君に告げ知らせるといふ下の内容を興しているのである。イカルの鳴き聲が悪いということは用いていない（此詩以多聲興下歌以告陳義。無取於惡聲）

本詩では鳥の鳴き聲には問題にせず、鳥が木にたくさん集まって鳴いていることを興として用いていると戴震は言つて、舊説を斥ける。ここで用いられているのは5—①で見た「興は事物の一端を取る」という認識である。戴震は、歐陽脩が唱えたこの比喩説を應用して自説を作り上げたことになる。

6—② 邶風「靜女」卒章

〔考正〕「自牧歸荑」と言うのは、「諸侯の正夫人に付き従つて嫁いできた靜女が」城の近郊で休憩したことを言う。〔爾雅〕⁵⁶に、「郊外を之れ牧と謂ふ」とある。「荑」^{ツバナ}はまた眞つ白で清潔なことのたとえである。その「管」を美め、その「荑」を美めるのは、靜女を欽慕していることを表すためのたとえとして言つたものである。始めにその人本人を見ることを思っているのに、それに續いて彼女の持ち物を見られることを思つており、始めに城下までやつて來たことを言っているのに、最後には近郊までやつて來たと言つてい「て順序

がどちらも逆轉してい」ることから、実際にはこのようなことがあったわけではないことがわかる（自牧歸美、言乎説舍近郊也。爾雅郊外謂之牧、萑亦以爲潔白之喻。美其管、美其萑、設言以欣慕其人耳。始思見其人、繼思得見其物、始言至城下、終乃言至於郊。非寔有是事可知）

ここでも、5—④で取り上げた「設言」という術語を用いて解釋が行われている。⁵⁷ 戴震は本詩で歌われている「靜女」とは、諸侯に嫡夫人として嫁ぐ姫君の媵^{そいよめ}として付き従いやつて来た女性であり、首章ではまだ到着しない彼女を、歌い手である臣下が作法どおり城隅で迎えるために待っている様子⁵⁸が歌われているとする。それを承けて、二章では彼女が「彤管」を贈ったこと、卒章では城に到着する前に城外の近郊で休息する彼女が「萑^{ハク}」を贈ってくれたことが歌われているが、これらはいずれも「設言」、すなわち現實には起こっていないことを假想したものと戴震は言う。すなわち二章・卒章の内容を虚構と捉えるのである。

本例は『補傳』にすでに同趣旨の説が見えるが、王政氏はこれを取り上げ、戴震が「設言」の概念によって詩中の虚構表現の存在に注意していることを、同じく『補傳』の中で頻用される「託言」という解釋概念との關連の中で論じ、戴震の詩經學の特徴として指摘している。⁵⁹ 氏の説を参考にすれば、戴震は『補傳』の段階で虚構表現という觀點から詩篇を分析する方法を用いて、『考正』はそれを受け継いだということになるが、前節の考察に據れば、戴震はこのような解釋法を宋代詩經學から學び取ったということになる。

本例では「設言」という觀點が、詩篇の敘述の構造についての理解に結びついていることにも注目すべきである。本詩は實際の出來事を歌った部分（首章）と虚構部分（二・卒章）という次元を異にする二つの部分が構造的に組み合わされて成り立っていると『考正』は言う。そのように判断する根據は、本詩の歌われ方が自然の流れと逆に

なっていることにあると戴震は言う。すなわち歌われる対象について言えば、自然な視點の流れとしては持ち物から本人へと移動すべきはずのところ、本詩では本人（首章）から彼女の持ち物（二・卒章）という敘述の順序になつていて逆轉しており、歌われている場面について言えば、時系列としては郊外から城隅と敘述が移っていくべきところが、城隅（首章）から郊外（二・卒章）という順序になつていて逆轉していると戴震は考える。そこから彼は本詩の構成を、臣下が城隅で静女を待ちながら（首章）、まだ見ぬ静女の賢徳ぶりを想像している（二・卒章）と把握する。このように詩中の内容が現實をベースとしながらも虚構が組み入れられているという認識によつて詩篇を構造的に捉え解釋するのは、宋代詩經學の解釋の特徴をなすものであることを、以前論じたことがある⁶¹。このことから、戴震は詩篇解釋の基本的認識を宋代詩經學から学び取つた上で、自身の詩經解釋に導入していると考へることができると考へることができる。

『補傳』では「設言」についての言及はあるものの、このような全體的構成についての言及はない。これから考へると、戴震は夙に『補傳』の段階から虚構概念を詩篇解釋に導入していたが、『考正』ではそこから考察を發展させて、虚構という觀點を詩篇の全體的構成の把握と結びつけたということになる。『考正』の説は、『補傳』の説が單純に残留したものではなく、それをさらに研ぎ澄ましてできたものということになり、宋代詩經學から學んだことが戴震において持續的に發展している様子が窺へる。

なお、すでに述べたように王政氏は、託言という見地から詩人の意圖を探る解釋方法を戴震が驅使していたことを指摘するが、氏も指摘するように、また筆者も以前論じたことがあるように、託言による解釋は朱熹によつて活用されたものである。これもまた戴震が宋代詩經學から學んだ解釋概念および方法論ということができると考へることができる。

殆及公子同歸 殆んど公子に及びて同に歸せんとす

〔考正〕 幽公の公女および民の嬢で、適齡期のうちに人に嫁ごうとする者がいた。詩はこのことに假託して言葉を作り、「殆及公子同歸」と言った。もうすぐ公女と時を同じくして嫁ごうとしていると言うのである。婦人が嫁ぐことを「歸す」という。言外に國の上下が相親しむことまるで一家のようであることを示している（公之女公子及民之女子有及時將嫁者、詩託此爲之辭曰、殆及公子同歸、言將與公之子同時而嫁也。婦人謂嫁曰歸。於言外見上下相知如一家矣）

この考證は『補傳』には見えず、『考正』の段階で新たに加えられたものである。戴震は、詩句に歌われている公女と庶民の女が連れ立って嫁入りしようとするというのは實際の状況ではなく「假託」であると言う。つまり、公女と庶民の女がどちらも結婚の季節に間に合って嫁入りできたことを、まるで二人が相連れ立って嫁入りしようとしていると比喩的に述べたものだとして解するのである。その上で「言外に於いて見ず」と言って、この句の裏に隠されている詩人の表現意圖を推測して、このような比喩的な表現を用いて國の上下の人々がお互いに心を通い合わせている雰圍氣を伝えようとしているのだと解釋しているのである。この「言外」という術語は例えば嚴粲の詩經學の特徴を論じる時にしばしば取り上げられるように、やはり宋代詩經學の典型的な解釋の方法的概念であった。

なお『考正』では、本詩に三例見える「公子」の語が諸侯の男女の子供いずれをも指し得ると言い、本章および四章が、女性側の視点に立って歌われているので「公子」は公女を指し、五章は男性側の視点に立って歌われているので「公子」は幽公の息子を指すと述べている。語句の意味の考證が、本詩がどのような構成のもといかなる視点から歌われているかという詩篇全體の把握とを組み合わされている。これも『補傳』には見られない『考正』の新たな説であり、戴震が『考正』の段階においても詩篇の構成を解明する努力を持続させ解釋を更新していたことを表す。

以上見てきたように、『考正』の中には明示的な引用のみならず、出典を明らかにしない引用、そして直接的な引用ではなく解釋の方法論を咀嚼し應用したものと、様々な形で宋代詩經學の成果が取り入れられている。戴震はなぜ自身の詩經學を作り上げる上で、宋人の經説を導入しなければならなかったのであろうか。『考正』の考證の中で、宋人の經説はどのような役割を果たしているであろうか。

4—①では、興の意味を考える時に、興句を詩篇全體との關連の中で捉えようとした程頤の説が引用されていた。4—②では、詩篇の各章が漸層法を用いているという認識によって、程頤の説に依據しつつ詩篇全體の中で事態の推移變化を読み取っていた。5—①では、比喩と比喩されるものとの對應關係についての歐陽脩の説が引かれていた。5—④では、「設言」という解釋概念を用いた嚴粲の解釋が引用されていた。

詩篇全體との繋がりの中で興句の意味を探る、漸層法、比喩の對應關係、設言、これらは筆者が從來考察してきたように、宋代詩經學が漢唐の解釋を超越し詩篇の本義に迫るために驅使した解釋の方法論である。4—②で、程頤の解釋を一部採用せず新たな解釋を提示したのは各章の同形の句における視点を一致させるためと考えられるこ

とを論じたが、このような視點の一致を重視するのは、宋人が詩篇解釋を行う時に論理的・一貫性を重視したのと一致している。

これに加えて6—①・②・③は、宋代詩經學の解釋概念・解釋方法論を吸収した上で、戴震独自の考察に用いたものであるが、ここでも、詩句の解釋を詩篇全體との關連の中で考えようとする志向が見られた。このように考えると、戴震は、詩句が詩全體の中でどのように機能しているか、詩人がどのような表現意圖を持っていたかを把握するために、宋代の學者の説を参照することが多かったことがわかる。戴震が宋代詩經學を必要としたのは、詩篇解釋における全體的把握を重視したためと言うことができるのではないだろうか。

7 戴震の緣辭生訓批判と宋代詩經學との關係

7—① 周南「關雎」五章

參差荇菜 參差たる荇菜

左右芼之 左右に之を芼す

〔考正〕毛傳に、「『芼』は擇ぶえらぶということである」とある。戴震按ずるに、『爾雅』に「芼は搯なり」とあり、その郭璞注に、「菜を抜き取ることである」と言う。呂祖謙『呂氏家塾讀詩記』に董道とうゆう『廣川詩故』の説を引いて、「芼は煮て神に進めることである」と言う。説はそれぞれ異なっているが、いずれも詩句がこう言ってい

るといふ先入観に合わせて字の意味を捻り出したもの（縁辭生訓）にすぎない（傳、芼擇也。震按、爾雅、芼、擷也。郭注云謂拔取葉。呂伯恭讀詩記引董氏云、芼、熟薦之也。說各不同、皆緣辭生訓耳）

『杲注』でも同趣旨の發言を行い、さらに言葉を加えて次のように言う。

『爾雅』・毛傳・『集傳』の三説はみな縁辭生訓であり、文字の字形に照らして證明できるものではない（三説皆縁辭生訓、於字之偏旁不能明也）

「縁辭生訓」は戴震がしばしば戒めた解釋法である。⁶⁶ところで、文脈を頼りに字句の意味を推し測るのは、宋代詩經學の重要な方法であり、この方法が尖鋭な形で現れたのが、王安石・程頤の詩經解釋である。王安石の詩經解釋に牽強附會な説が多いということには定評があり、程頤の詩經解釋に對しては、彼の私淑の弟子である朱熹による「程先生の詩傳は義を取ること太多し。詩人は平易にして、恐らくは此の如くにはあらじ（程先生詩傳取義太多。詩人平易、恐不如此）」という批判が有名である。このような弱點は、彼らがあらかじめ詩篇の言わんとするところについての見解を持ち、それに照らして字義を求めようとしたところから生まれるところが多かつたであろう。とすれば、これらは戴震がしばしば注意を喚起した「縁辭生訓」の典型例ということになるだろう。例えば、5―②で大雅「皇矣」の「憎」字を「増す」と訓じる戴震の説が程頤に基づくのを見たが、程頤はもともと自分の字解を、「憎めば心に限度を超えるところがある。だから、その字義は『増』と通じるのである」と説明していた。これは最初に答えありきの牽強附會な説明であり、まさしく「縁辭生訓」と呼ぶにふさわしいものである。戴震が、

あるいはより古くは朱熹が程頤の説を繼承しながらこの説明部分は無視したのもそれを認識していたためであると思われる。

とすれば、程頤・王安石の解釋は緣辭生訓を批判する戴震の詩經學にとって受け入れがたいものであったはずである。ところが、戴震はこれらを引用している。「皇矣」においては、戴震は程頤の問題のある説明を無視したのみで、それに代わる根拠を示すことなく終わっているため、經說としての説得力に欠けることは否めない。緣辭生訓の傾向を持つ宋代詩經學の説を引用し続けるためには何らかの方策が必要となるはずである。

ここで、5—③の小雅「北山」を再び取り上げてみよう。戴震は古説を斥け、「賢」を「多い」と訓ずる王安石の説を引用していた。その中で、王安石が『禮記』『投壺』一例を根拠にするのみであったのを、戴震は「賢」の字形から本義を割り出し、『孟子』に反證とも見える説があったのを、自説に矛盾しないよう読み解き補強に努めていた。とりわけここでなされた字形から本義を割り出すというのは、「關雎」の『杲注』に述べる「文字の字形に照らして證明」するという方法論に合致している。

つまり、ここでは王安石の解釋を引用しつつ、戴震自身が提唱した字形からの考證という方法を用いて、王説が持っていた孤證という弱點を補うという方法を取っているのである。このような方法を取るならば、緣辭生訓による經說を逆に戴震自身の研究の起點として捉え直すことができる。言い換えるならば、宋代の學說が發想を提供しているのを考證學的方法によって檢證し鍛錬する方法を戴震は取ったと位置付けることができる。

戴震にとって宋代の説は漢學的方法によって補強しながら用いる素材としてのみあったのではない。『考正』のなかには、逆の方向性を持つ方法論も見出せる。

7—② 邇風「匏有苦葉」首章

匏有苦葉 匏に苦葉有り

濟有深涉 濟に深涉有り

深則厲 深ければ則ち厲し

淺則揭 淺ければ則ち掲ぐ

〔傳〕衣を着たまま川を渡るのを「厲」と言う。帶より上まで水に漬かることを言う。⁽⁶⁶⁾「掲」は衣の裾をからげることである。様々な状況に應じて適切な手段を講じ、川の深いところに出會つたら、衣の帶の上まで水に漬かつて渡り、淺いところだったら衣の裾を捲り上げて渡る。男女の交際も、どうして禮儀なくしてすまされようか。さもなければ自分でもどうしようもない事態に陥ってしまうことになる（以衣涉水爲厲、謂由帶以上也。掲、褰衣也。遭時制宜、如遇水深則厲、淺則掲矣。男女之際、安可以無禮儀。將無以自濟也）

〔考正〕しかしながら、毛傳のように解釋してしまったならば、「衣を以て水を涉つ」てしまっている以上、渡れない川だとはまったく言えなくなってしまう。そうすると、本詩の作者が、川の深さを測らなければ溺れて助けられない羽目に陥ってしまうということに託して言わんとしている意圖に表現が適合しなくなってしまうようである（然以是説詩、既以衣涉水矣、則何不可涉乎。似與詩人託言不度淺深、將至於溺不可救之意未協）

ここで用いられた「託言」という術語について、王政氏が戴震の詩經學の特質を表すものとして注目していることはすでに述べた。⁽⁶⁷⁾「託言」は、詩中で何らかの事物が歌われているが、作者の意圖はその事物自體にはなく、表現の裏に何か別の事柄についての思いや考えを託していると捉える解釋概念を言う。本詩では、毛傳（あるいは毛傳が據った『爾雅』「釋水」⁽⁶⁸⁾）の訓詁に従って、水が深ければ「帶の上まで水に漬かつて渡り」、浅ければ「衣をかち上げて渡る」と解釋してしまうと、状況に応じて然るべき對處をした上で川を徒渡りしていることになってしまうので、本詩の作者が伝えようとしている意圖——向こう見ずに行動すれば取り返しの付かないことになってしまうので、行うべきときは敢然として行すが、そうではないときは決然として思い止まるべきである——に詩句表現が相應しくなくなってしまうと批判する。その上で、戴震は『說文』の釋義や『水經注』に載る方言語彙などを根據に、「厲」を「橋」の意味とする。⁽⁶⁹⁾

蔡錦芳氏は、本例を戴震が治學の要諦とした「十分之見」（『戴東原集』卷九「與姚孝廉姬傳書」）の好例として挙げ、

戴震の考證には本證あり、傍證あり、材料あり、推理あり、「毛傳が依據した」『爾雅』「釋水」の「衣を以て水を渉るを厲と爲す」という訓詁」を否定し『說文』「水部の「硤、石を履みて水を渡る也」という說解」を肯定し、嚴密、合理的かつ説得力に富む説と言うべきである。

と評する。⁽⁷⁰⁾これまでの考察を踏まえると、蔡氏の評價に付け加えて本例で注目すべきことがもう一つある。『詩本義』「匏有苦葉」本義に次のように言う。

詩人は、腰にヒョウタンの葉をつけて川を渡ろうとするものが、水の深さを考えもせず、ただただ渡ること躍起になっていることを歌って、それが、宣公が夷姜と宣姜の二人の女性と不義を働き、それがしてよいことかどうかを反省もせず、欲望の赴くまま、なんと少しでも二人を手に入れようと躍起になり、滅亡を招く罪を犯していることを恐れもしなかったのとそっくりであると言う。宣公の行状がちょうど徒渡りをするものが溺れ死ぬ危険に晒されているのを氣にもしないようなものである（詩人以腰匏葉以涉濟者、不問水深淺、惟意所往、期於必濟。如宣公烝淫夷夷二姜、不問可否、惟意所欲、期於必得、不懼滅亡之罪。如涉濟者不思沉溺之禍也）

歐陽脩も、川が渡れる深さかどうか測りもせず無謀に徒渡りしようとするのが、欲望に任せて淫亂にふける宣公を暗示していると言う。『考正』で戴震が述べている説にはこの歐陽脩の解釋の反映が見られる。すなわち、戴震は、詩人がその意圖を「託言」という虚構表現を用いて伝えようとしているという解釋を歐陽脩から繼承し、その認識に基づいて毛傳の訓詁が誤っていると判定した上で、考證學的方法によって妥當な字義解釋を導き出しているのである。漢代の故訓という、清朝考證學にとって解釋の基本とすべき經說の妥當性を、宋代詩經學において發展した、詩篇における部分と全體との整合性、あるいは詩句と作者の表現意圖（文意）との整合性という觀點から検討するという考察の手法をここに見ることができると言える。

5—③に見られた、考證學的方法による宋人の說の補強と、7—②の宋人の解釋方法による漢代の訓詁の検討、この對照的な二例は、戴震にとって宋代詩經學の學問方法が、考證の方法論を支える重要な要素になっていたことを表す。大雅「生民」五章の『考正』に次のように言う。

詩の言葉は秩序正しく配列されていて、上下の文脈から推論可能である。その文字の意味については、經の中に一貫する證據があるものから推察すれば、誤りを極力避けることができる。解釋者は往々にして言葉の意味を先入観を持って考えそれに合わせて文字の意味を捻り出し、ただ一面的な根據のみを擧げて説をなすものであるが、そのような態度は戸惑いをますます大きくしてしまうものである（詩辭相比次、上下可推、至其字義、推之經中有通證、庶少差失。說者往往緣辭生訓、偏舉一隅、惑滋多於是矣）

戴震は、「詩辭相比次すれば、上下もて推すべし」という、全體の文脈を見据えた字義解釋を提唱している。本稿でこれまで見た例はこれに當たると考えられる。とすれば、宋代詩經學の方法は戴震の解釋學の體系の中に確固として組み入れられており、古訓を重視し、字音字形との關連で字義を考えるなどの、いわゆる漢學的方法と有機的に結びつくことよって、確實性の高い考證を成り立たせるものとして機能していたと考えることができる。筆者は本稿の問題設定において、「清朝考證學的詩經學はそれ自體で純然たる體系として自足し完結しており、そこでは宋代詩經學の經説は異質の要素として表層的に附加されるのみで、兩者は最後まで異質な學問であり、ついに融合することがなかった」という可能性に觸れたが、それは少なくとも戴震の詩經學についてはこれまでの考察によつて否定されたと言つてよいのではないだろうか。解釋學的方法論の發展という見地から、宋代と戴震の詩經學とは深い關係性を有している。

8 結論と補足

第1節において筆者は次の二つの問題を提起した。

一、戴震詩經學にとって、宋代詩經學はいかなる内實を持つものであったのだろうか。本當に程朱理學の埒内に収まるものであったのか。それを超える範圍と深度を持つものであったか。

二、宋代詩經學の影響は、どの程度のタイムスパンで捉えるべきであろうか。楊應芹氏の言うように、戴震詩經學の初期における時限的なものであり、後に超克されたのであろうか。あるいは、時期的な限定を越え、彼の生涯に亘る詩經學の構成要素として持續的に搖るぎない地位を保ち續けたのであろうか。

これまでの考察によって、一については戴震詩經學にとっての宋代詩經學が程朱理學の枠を大きく超える存在であったことは明らかである。戴震が宋代詩經學から學び取ったものは、詩句の意味を理學的に解釋することではなく、詩篇の全體性・構造性を重視して解釋する態度とその方法論の方がより本質的であったと考えられるからである。また、影響力がこのような性格のものであったことに基づけば、二についても戴震詩經學にとって宋代詩經學は、『補傳』から『呆注』に至るまで持續的な影響を及ぼし續けたと考えざるべきであろう。實際に、本稿でも何度か觸れたように、『考正』の説には『呆注』にも引き繼がれ戴震の詩經解釋において一貫して保持されたものが多し。すなわち、戴震の詩經學は宋代詩經學の方法論を深く吸収し、その上で独自の學的展開を成し遂げたと位置付けられる。そのように考えてこそ、彼の再傳の弟子である陳奐が漢學獨尊を掲げながらも、その實際の詩篇解釋を見ると、歐陽脩や朱熹といった宋代の詩經學者からの影響力がそこかしこに見出せることも自然に理解できる。

第3節で検討したように、『考正』執筆當時の戴震には、確かに『集傳』をはじめとする宋元明の詩經學になるべく依據せずに研究を進めようという構想があったと思われる。⁷¹ただし、その理由を考える際には、戴震の宋代詩經學に對する學術的評價が低下したという要因の他に、『考正』の著述の性格も考慮しなければならないだろう。

『考正』の内題に「毛鄭詩考正卷一／毛詩故訓傳鄭氏箋」と言う。これは、この著述が毛傳と鄭箋の考證・検討を趣旨とすることを表している。この點、清・周中孚『鄭堂讀書記』卷八の、

この『考正』という書物は……おおむねみな古訓古義に基づき、正しい意味を追究しているが、やはり毛傳鄭箋を補い助けることを主たる態度としていて、宋人の詩經注釋の書物のように、専ら毛鄭を批判論難して、自ら別に一家を立てようという意圖はない（是書……大都俱本古訓古義、惟求其是、而仍以輔翼傳箋爲主、非若宋人說詩諸書、專以駁斥毛鄭而別名一家也）

という評價は、『毛鄭詩考正』の著述の意圖を正しく捉えたものといえることができる。⁷²この著述において戴震は、漢代詩經學の學說を考證學的方法を用いて檢證し展開させることよってどこまで詩經の詩篇の眞の意義に到達できるかを探った、その意味で實驗的な著述であると位置付けられるのではないだろうか。とすれば、宋元明の詩說の引用が少くないのは、著述の意圖から自然に導き出された方針であって、必ずしもそれらを輕視したためとは言い切れないことになる。また、このように考えれば、第3節の末尾で言及したように『考正』が『補傳』に見える朱子の注釋および宋元明の詩說を取り入れなかったにも関わらず、後の『杲注』では朱注を傳箋と並んで引用していることも自然に理解できるのではないだろうか。

しかしながら、本稿で見たように、その著述の意圖の如何に關わらず戴震は『考正』においても宋代詩經學の方を直接的にも間接的にも援用しなければならなかった。『考正』で狙った方法論は貫徹不可能であったということになる。宋代詩經學は戴震の意識を遙かに超えて彼の詩經學の内奥に食い込み、もはや切り離し得ぬまでに融合していたのである。清朝考證學の學問方法の確立に大きな功績を残した戴震においてこのような現象が見られるということは、戴震個人の個別的事象として片付けられず、より廣い視野で問題を考えなければならないことを意味するであろう。すなわち、清朝考證學的詩經學の解釋の方法論を構築するためには、漢代の學問を客觀考證の手法を用いて吟味し鍛え上げるだけでは充分ではなく、宋代詩經學者が追求し開發した、全體性・構造的に着眼する方法を取り入れなければならなかったことを意味しているのではないだろうか。清朝考證學的詩經學を詩經解釋學史の中に正當に定位するためには、宋代詩經學との關係を重視しなければならないと考えられる。

注

- (1) 曲阜孔氏微波榭本。安徽叢書『戴東原先生全集』（筆者はその影印本、臺灣、大化書局、一九七八、を用いた）所收。
 (2) 同右。
 (3) 楊應芹・諸偉奇主編『戴震全書（修訂本）』第一冊（安徽古籍叢書、黃山書社、二〇一〇）所收。
 (4) 『戴東原集』卷十（『戴東原先生全集』所收。その點校本『戴震文集』、中華書局、一九八〇、も參考にした）。抄本卷首所掲の序（『戴震全書』第一冊に載る書影を見ると、題名は附されていない）とは字句に若干異同がある。
 (5) 『毛鄭詩考正』『杲溪詩經補注』兩書の著述の性格と資料としての制約については、戴維『詩經研究史』（湖南教育出版社、二〇〇一）を始め、諸家によってすでに説明されているが、行論の便のため簡単にまとめてみる。
 『毛鄭詩考正』は、詩經全三〇五篇（佚亡詩を除く）のうち考證の對象とする詩篇一一八篇（國風160篇中44篇、27・

5%・小雅74編中33篇44・6%・大雅31篇中17篇54・8%・頌40篇中24篇60%)に止まっています、國風・小雅・大雅・頌を覆ってはいえるものの、『詩經』全篇を網羅してはいない。さらにこの著述は、主に詩篇中の字義についての考證を札記風に列挙したものであり、それぞれの詩篇の全體的意味および作詩の意圖についての戴震の見解を必ずしも窺えるものではない。

一方、『杲溪詩經補注』は、詩篇全體の意味が把握できるよう、各章の字句や詩句についての考證がなされ、また作詩の意圖についての戴震の考えも、各詩篇の篇題の下に簡明に示されており、その意味で首尾整った注釋と言える。しかし注釋がなされているのは、國風の始めの二南(周南・召南)に收められる二五篇に止まっている。二南は、詩經の正經、國風の正風として特別の地位を占め、そこに收められた詩編は内容的にも性格上も他の諸篇とは別格の存在として考えられているので、二南注釋に現れた認識をそのまま擴大して、戴震の詩經全體に對する認識として考えることはできない。

このように兩書はそれぞれ、著述の體例、範圍の面で全面的かつ完備した詩經の注釋書としての要件を備えておらず、戴震の詩經學の全體像を窺うには不十分である。このため、從來彼の詩經學を再構築するには、兩書の特徴を重ね合わせ、かつ『經考』(『戴東原先生全集』影印南陵徐氏復校本)・『經考附錄』(『戴東原先生全集』影印歙縣許氏藏汪氏不疏園初寫本)など他の著述に載る詩經についての經說によつて兩著の缺を補い、多分に推測を交えつつ試行するしかなかった。筆者もかつて、このような方法で戴震詩經學の再構築を目指したことがある。拙稿『戴震の詩經學——『杲溪詩經補注』の立場と方法——』(『日本中國學會報』第四四集、一九九二)参照。

(6) 「毛詩補傳序」に、「時乾隆癸酉仲夏、戴震撰」の記年がある。すなわち、乾隆十三年、一七五三、戴震三一歳の年である。

(7) 筆者が目撃した主な著作・論文に以下のようなものがある。

・王政「論戴震『毛詩補傳』的釋詩特點及詩學觀點」(『經學研究集刊』第二期、國立高雄師範大學經學研究所、二〇〇六・一〇)。

- ・高再蘭・王政「論戴震的『毛詩補傳』」（『湖南大學學報（社會科學版）』第三〇卷第三期、二〇一六年五月）……右の王政、二〇〇六と同内容と見受けられる。
- ・陳海燕「論戴震『毛詩補傳』對舊說的態度」（『宿州學院學報』、第二〇卷第一期、二〇〇五年二月）
- ・程嫩生「戴震『毛詩補傳』與『杲溪詩經補注』比較」（『寧夏大學學報（人文社會科學版）』第二九卷第二期、二〇〇七・三）。
- ・同「戴氏經考」爲戴震『毛詩補傳』的補充考證」（『南昌大學學報（人文社會科學版）』、第三九卷第三期、二〇〇八・五）。
- ・同「戴震早年對朱熹學術的評判 以戴震『毛詩補傳』與朱熹『詩集傳』爲例」（『江西社會科學』二〇一一年第九期）。
- ・楊應芹「關於『戴氏經考』即『毛詩補傳』的考證」（『文獻』、一九九五年第一期）。
- (8) 陳海燕二〇〇五、六八頁。
- (9) 實際には、『補傳』の宋代詩經學者の引用狀況を調査してみると、當時國家公認の注釋であった朱熹『詩集傳』からの引用二五四例は別格とすれば、南宋・嚴粲『詩緝』からの引用が三三例あり、呂祖謙や謝枋得といった學者を大きく凌駕していることがわかる（附表2参照）。これは、清代詩經學に對して、嚴粲の與えた影響の大きさを端的に表すものであると同時に、戴震詩經學の本質を考察する上でも特筆すべき事柄である。これについては、稿を改めて考察したい。
- (10) 楊應芹一九九五、二二五頁。
- (11) 拙稿「深讀みの手法——程頤の詩經解釋の志向性とその宋代詩經學史における位置——」（慶應義塾大學日吉紀要『中國研究』第四號、二〇一一）参照。
- (12) 拙稿「訓詁を綴るもの——陳奐『詩毛氏傳疏』に見られる歐陽脩『詩本義』の影響——」（宋代詩文研究會『橄欖』第一二三號、二〇〇五年十二月）。
- (13) 郭全芝「『詩毛氏傳疏』與『詩集傳』」（清代《詩經》新疏研究、安徽大學出版社、二〇一〇、第三章第四節）。

- (14) 程敏生二〇〇八では、新たな根據に基づいて、『戴氏經考』がすなわち『毛詩補傳』であり、乾隆十七年には成書していたと考えられることを、説得力のある證明を行っている。
- (15) 「毛詩補傳序」に、「今、全詩について、その字義や名物を各章下で考究し、作詩の意によつてその考證を敷衍することはしなかつた。……作詩の意は、……しばらく孔子のあの『詩三百、一言以て之を蔽へば、曰く、思ひ邪無し』(『論語』「爲政」)という論斷に基づいて、各詩ごとに推論し、それを篇題の後に附載した(今就全詩、考其字義名物於各章之下、不以作詩之意衍其說。……作詩之意……姑以夫子之斷夫三百者、各推而論之、用附於篇題後)」と云う。
- (16) 『詩經研究史』(湖南教育出版社、二〇〇一) 五二五頁。
- (17) 『戴東原集』卷十。
- (18) 「詩比義述序」に、「昔壬申、乾隆十七年、癸酉、乾隆十八年にかけて、私は『詩補傳』を著しましたが完成には至らず、書中の辨證を別に筆録して一帙の書としました(昔壬申、癸酉歲、震爲詩補傳未成、別錄書內辨證成一帙)」と云う。
- (19) 『詩經研究史』 五四四頁。
- (20) この點について戴維氏は、「只是《補注》僅存二《南》部分、所以只有二卷。不知《補傳》當時是僅作到《二南》止否」(前掲書五二五頁)と云うのみで、矛盾點として明確に認識しそれを解消する説を提示してはいない。
- (21) 「毛詩補傳序」の言葉。
- (22) 『詩經學史』(中華書局、二〇〇二) 下冊五〇六頁。
- (23) 程敏生二〇〇七。
- (24) 『戴東原先生全集』卷首。
- (25) その一例を、注(41)(71)に挙げたのを参照。
- (26) 程敏生二〇一一、一九六頁。
- (27) 『毛鄭詩考正』卷二、小雅「常棣」に、「私が案ずるに、『鄂不』は、今の書き方では『鄂附』の字を用いる(震按、

- 鄂不、今字爲專附」と言うのに従って訓じた。
- (28) 本詩小序に、「常棣、燕兄弟也。閔管蔡之失道、故作常棣焉」と言う。『補傳』では、篇題下で小序の全文を引き、『考正』でも小序の説に對する批判はないことから、小序の説に従っていると考えられる。
- (29) 「四國」については、毛傳に「四國、管・蔡・商・奄也」と言う。「程説」に、「商奄始率管蔡爲流言、遂以叛」と言うので、程頤も毛傳と同意見である。『考正』にもこれについて特に言及がないので、戴震も同意見と考えられる。
- (30) 「程説」には次のように言う。
訛與化同、動也。或寢或叱、振動於四國、爲是四國之亂振動、恐其益亂天下……適、逕急也。加切於訛
- (31) 『爾雅』「釋言」に、「皇匡正也」とあり、郭璞注に「詩曰、四國是皇」と言う（十三經注疏 整理本『爾雅注疏』、北京大學出版社、九一頁）。
- (32) 程元敏『三經新義輯考彙評』(二)——詩經（國立編譯館、一九八六、一八八頁）に據れば、王安石の本經説は、南宋・王應麟『困學紀聞』卷三、明・何楷『詩經世本古義』卷十六に引かれる。附表3から、戴震がこの二書のいずれをも見ていたことがわかるので、これらの書物から王安石の説を知ったと推定できる。
- (33) 杜預注を引いた後、「顧炎武曰、古本竝作爰。左氏宣十二年傳引此亦作爰。朱子依家語改作爰」と附注がつけられている。
- (34) 鄭箋は、「爰、曰也」と訓じている。戴震はこれに従わず杜預注を参照しているのである。ただし、鄭箋は續けて「今政亂、國將有憂病者矣。曰此禍其所之歸乎。言憂病之禍、必自之歸於亂」と言うところから、「爰其適歸」の句全體としては、杜預と同じく疑問として解していると考えられる。『正義』も「曰此憂病之禍、其何所之歸乎」と疑問文として釋する。
- (35) 前注に示したように鄭玄も先の疑問に對する答えを想定して提示している。しかし、それは「禍は必ずや亂に歸結するだろう」という答えであり、『考正』段階での戴震説（すなわち王安石説）とは異なる。
- (36) 「摯」の字、十三經注疏『毛詩正義』に従う。鄭箋同じ。

(37) 『考正』に、「古字鶯通用摯。夏小正鷹始摯。曲禮前有摯獸。是其證。春秋傳鄭子言少皞以鳥名官、雉鳩氏司馬也。説曰摯而有別、故爲司馬主法制。義本毛詩。不得如箋所云明矣」と言う。

(38) 『杲注』『蝨斯』には、對應する經説はない。

(39) 『補傳』『蝨斯』の篇義に、「下美上也。樛木歌于前、蝨斯歌于後、可以觀仁矣。毛詩序、后妃子孫眾多也」と言う。漢唐詩經學では、本詩を文王の后太姒の婦徳を褒め稱える詩とし、朱熹も同説であるが、戴震は詩の對象を太姒に特定せず下の者が上の者を褒め稱える詩と一般化して捉えていることがわかる。

(40) ここで取り上げた歐陽脩の比喩説が、詩經解釋學史上特筆すべき意義を持つていることについては以前論じた。拙稿『詩本義』に見られる歐陽脩の比喩説——傳箋正義との比較という視座で——（慶應義塾大學文學部『藝文研究』第八三號、二〇〇四年一二年）参照。「關雎」論の日本語譯も前稿から引用した。

(41) 本節の議論からは外れるが付隨的に注意したいことがある。「關雎」の比喩について、『補傳』『考正』『杲注』三書の議論を今一度竝べて見よう。

〔補傳〕本詩はただ和やかに鳴き交わすという點を興として用いた（詩但興於和鳴）

〔考正〕雉鳩の和やかに鳴き交わすという點と雌雄の別を守るという點と目をつけて比喩に用いた（雉鳩取於和鳴及有別）

〔杲注〕雉鳩が雌雄の別を守るというのは、その本性によってそうなつてるのである。だから、詩人はそこに比喩としての意圖を寄せた（雉鳩之有別、本於其性成。是以詩寄意焉）

〔關雎〕が雉鳩の屬性の一部のみを比喩に用いているという認識は三書とも同じであるが、それでは何の屬性を比喩として用いるかという點では、

〔補傳〕和やかに鳴き交わす

〔考正〕和やかに鳴き交わす・雌雄の別を守る

〔杲注〕雌雄の別を守る

と、三書に少しずつずれがあり、しかも『考正』は『補傳』と『杲注』の説を兩方含む形になっている。第二節で、三書のうち『補傳』がはじめに書かれたことはほぼ動かないが、『考正』と『杲注』の著述の前後については異論があること、現在のところ『考正』が『杲注』に先立つとする説の方が有力であるが、しかしその根拠は段玉裁による『年譜』という外在的なものに止まっていると述べた。本例において『補傳』が「和鳴」の説を取っているのを起點とすれば、解釋は『補傳』↓『考正』↓『杲注』順序で變化したと考えるのがもつとも自然ではないだろうか。また、『補傳』『杲注』で「賢い后を捜し求める詩である（求賢妃也）」と本詩の篇義を説明しているのに着目すると、『杲注』で雉鳩の「別有り」を比喻として用いているのは、それが妃の「賢」なる内實を説明したものと捉えた結果とも考えられる。本詩を道徳性の見地から解釋するという點では、「和鳴」より「有別」のほうがより優れるとすることができ、そこからすると比喻を道徳的意味に合致するよう検討を重ねた結論が『杲注』だったと考えることができる。とすれば、これは經説から三書の前後關係を説明づけたものということになる。

もちろん、本例は今のところ孤證に止まり、ここから性急に結論を引き出すことはできない。しかし、今後三書の著述の順序を議論する上では、内部的根拠を探っていくことが必要となるであろう。それには、三書の經説そのものを比較し相互の關係を考察するというのは有力な方法となる。このことに鑑みれば、本例はサンプルとしての意義を持つであろう。

(42) 「二國」が指すものについては異説が多い。毛傳は殷と夏とする。程頤も同じ。戴震は殷と周とする。『考正』に、「夏已遠、必不連及之。詩言周之興、周所代者殷也。故稱之曰此「二國」と言う。毛傳・鄭箋・程頤が、「二國」を悪行をなした同種の國同士と捉え、次句の「其政不獲」を兩國の政治が天の意に適わなかったと解釋するのに對して、『考正』は「不獲」は正反對で釣り合わないという意味で、殷と周とはその政治が片や暴亂、片や良治と對照的であると云っていると解釋する。『補傳』にも同趣旨の説がある。

(43) 「彼四國」も異説がある。毛傳は四方とし、程頤も同じ。鄭玄は密・阮・徂・共の四國とする。『考正』は毛傳を是とし、「泛言四方之國、故曰彼四國。傳說是也。詩中言四國者多矣、皆概舉之常辭、故可知」と言う。詩經全體の用

例を通覧して訓詁の妥當性を測ることで、毛傳に傍證を加えている。『補傳』では毛傳を擧げるのみであるところから、これに従っていると考えられる。

(44) 前掲拙稿、二〇一一、第3節參照。ちなみに、段玉裁『詩經小學』卷二三では、本詩のこの字について、「朱子曰、當作增」と言い、朱熹の説として示している。

(45) 前掲拙稿、二〇一一、第3節參照。

(46) 引いては、段玉裁『詩經小學』が、程頤ではなく朱熹の説として示したことも同じ理由であろう。

(47) 清・焦循『孟子正義』卷十八「萬章章句上」の當該句の疏も、戴震の説を引用する段玉裁『說文解字注』を引用するが、その源泉である王安石については觸れるところがない（十三經清人注疏、中華書局、一九八七、下冊六三八頁）。

(48) 鄭元敏前掲書一八九頁。

(49) 鄭元敏前掲書一八九頁。

(50) 『補傳』には宋・曹粹中の説が多く引用されるが、彼の詩經注釋書『放齋詩說』は、清・朱彝尊『經義考』は『宋史』藝文志に據って著録するが、「未見」と注している。（劉毓慶『歷代詩經著述考（先秦——元代）』、中華書局、二〇〇二、一七七頁）。このことから戴震當時すでに佚書であったと思われる。曹粹中の説の一部は、南宋・段昌武『毛詩集解』、南宋・王應麟『困學紀聞』『詩地理考』に引かれており、戴震はこれらの書籍から曹粹中の詩説を引用したと考えられる。附表3の書目には名前がないが、上の事情から考えると、戴震は『毛詩集解』を見ていた可能性が高い。王安石の本經説が『毛詩集解』にも引かれていることから、戴震は『毛詩集解』によってもこの説を見ていた可能性も考えられる。

(51) ちなみに、『說文解字注』で戴震の説を引用する段玉裁は、孟子の詩解については、「我獨賢勞也。謂從事獨多、人逸己勞、如詩之後三章所云是也。増成勞字、明作詩之志以勞不得養父母而爲此言。非以勞釋賢」と説明する。

(52) 戴震の「賢の本義は『多』なり。貝に従ひ馭の聲」は『說文解字』を參照したものと考えられるが、これは引用と

- しては問題がある。段玉裁は『說文解字注』で、「賢、多財也」に作り、注に、「財各本作才。今正」と言う。これに據れば、『說文』各本は「賢、多才也。從貝叀聲」となっていた。これは、むしろ鄭玄の訓詁を支持するものと言うことになる。戴震が「多い」を「賢」の本義とする説には、古注の裏付けはなかったということになる。
- (53) 「滑我」「酤我」は、後に擧げる『考正』の説に基づいて「我滑」「我酤」の倒置として訓讀した。陳奐『詩毛氏傳疏』小雅「伐木」に、「有酒滑我、無酒酤我、此倒句也。我有酒則滑之、我無酒則酤之」と言うのが参考になる。
- (54) 嚴粲は、鄭箋の「酤、買也」に従っている。
- (55) 「爾」は、『十三經注疏』本、もと「有」に作る。『毛詩鄭箋』に「本作」として「爾」を示し、阮元「校勘記」がそれに従っているのによって改める。
- (56) 戴震の解釋の中に用いられる「說舍」は、衛風「碩人」四章の「碩人敖敖、說于農郊」の『正義』に「有大德之人敖敖然其形貌長美。其初來嫁則說舍於衛之近郊而整其車飾」とあり、他國からやって来た者が場内に入る前に郊外で休憩し身支度を調えるということ（音は「ゼイ」）。『補傳』では「碩人」の「說」に「音稅」という音注があり、戴震がここでも說舍の意味で解釋していたことがわかる。召南「甘棠」卒章「召伯所說」の毛傳に「說、舍也」と言い、『釋文』に、「說本或作稅、又作脫、同。始銳反。舍也」と言う。
- (57) 本詩については『補傳』でも、「郊外謂之牧、本其來自牧言之。萑、微物也。曰洵美且異、因又曰匪女之爲美、深致其欣慕靜女之意。美其管、美其夷、設言之以欣慕其人爾、非實有貽贈之事也」と同趣旨の解釋が同じく「設言」の術語を以て説明されている。
- (58) 『考正』に、「靜女其姝、俟我於城隅、此媵俟迎之禮。諸侯娶一國、二國往媵之、以姪姊從。晁而親迎、惟嫡夫人耳。媵則至乎城下以俟迎者、然後入」と言う。
- (59) 本詩首章「愛而不見」について、『考正』は、「愛而不見、迎之未至也。愛而猶隱然」と言い、「愛而」を姿が見えないう有様を表す形容詞と解釋する。
- (60) 王政、二〇〇六、二一五『詩』之『託言』參照。

- (61) 拙稿「いかにして詩を作り事と捉えるか?——『毛詩正義』に見られる假構認識と宋代におけるその發展——」(宋代詩文研究會會誌『橄欖』第十六號、二〇〇九) 参照。
- (62) 王政、二〇〇六、注53、二二〇頁。
- (63) 『詩經』の注釋を読み比べる(平成二二年度極東證券寄付講座 文獻學の世界『注釋書の古今東西』、慶應義塾大學文學部、二〇一〇)。
- (64) 例えば、黃忠愼『嚴祭詩緝新探』(文史哲學集、臺灣、文史哲出版社、二〇〇八) など。
- (65) 例えば、『戴東原集』卷三「答江慎修先生論小學」に「其〔爾雅〕解釋詩書、緣詞生訓、非字義之本然者、不一而足」と言い、卷十「古經解鈎沈序」に、「是故鑿空之弊有二、其一緣詞生訓也、其一守訛傳謬也」と言う。
- (66) 毛傳の「衣を以て水を渉る」が何を言わんとしているかについては異説が多く、いずれが正しいかにわかには定めがたい。しかし、諸家いづれも毛傳が川を徒渡りすることと解釋していると考ふる點では共通していて、説のバリエーションは戴震の毛傳批判の要點とは直接關わらない。ここでは、かりに高田眞治氏の説に従って譯した(『詩經』(上)、漢詩選1、集英社、一九九六、一四五頁)。
- (67) 注(60) 参照。
- (68) 戴震は、毛公は『爾雅』の訓詁に基づいて傳を著したと考えていた。これについては、拙稿「戴震の詩經研究における『爾雅』の意義」(慶應義塾大學文學部『藝文研究』第六一號、一九九二) 参照。
- (69) 『考正』に次のように言う、「許叔重說文解字、硤履石渡水也、引詩深則硤、字又作瀆、省用厲。酈道元水經注河水篇云、段國沙州記、吐谷渾於何上作橋謂之河厲。此可證橋有厲之名」。
- (70) 「談戴震『求十分之見』之治學方法」(『戴震生平與作品考論』、廣西師範大學出版社、二〇〇六) 二八九頁。
- (71) これに關して、『考正』では『集傳』の引用がわずかに一例に留まるが、十名の宋代の學者が引用されている一方、『晁注』では『集傳』の引用は数多いが、その他の宋代の學者の引用はごくわずかであるのは注目すべきである。本稿で示した『考正』が『集傳』を引かないのはその實驗性を表すとする假定が成り立つとすれば、『補傳』における

豊富な引用との比較において、『考正』『杲注』の宋代以降の學者の多寡は、戴震の宋代詩經學からの脱却の意圖の度合いを表すと考えられるからである。とすれば、これもまた、『考正』が『杲注』に先んじて成立したことの内在的證據と考えることができる。

(72) 周中孚のこの評語は、『毛鄭詩考正』説明(『戴震全書』(修訂版)第一冊)にも紹介されている。

〔附記〕 本稿初校提出後、林文華氏の『戴震經學之研究』第五章「詩經學」を閲覽した。特に戴震詩經注釋三書の執筆時期について詳しい考證がなされており参考となる(國立政治大學中國文學系九十三學年度博士論文、二〇〇五年五月。『政大機構典藏』nccur.lib.edu.tw/handle/140.119/35529。閲覽日二〇一七年二月十日)。

附表3：『毛鄭詩考正』引用諸家

朝代	氏名	引用数
宋	歐陽脩	1
	劉敞	1
	王安石	1
	程氏	3
	程大昌	1
	沈括	1
	呂祖謙	2
	朱熹	1
	嚴粲	1
	王應麟	2
元	張以寧	1
清	顧炎武	2
	方以智	1
	閻若璩	2
不明	趙子常	1

朝代	引用學者數
宋	10
元	1
明	0
清	3
不明	1
計	15

振り捨てきれない遺産

朝代	學者名	引用回数	著述名	資料來源
元	許謙	2	詩集傳名物鈔8卷	歷代362
元	胡一桂	1	詩集傳附錄纂疏20卷	歷代344
元	朱公遷	1	詩傳疏義20卷	歷代368
元	陳櫟	1	詩經句解・詩大旨・讀詩記	歷代353
元	劉瑾	2	詩傳通釋20卷	歷代356
元	梁益	2	詩傳旁通15卷	歷代359
明	王志長	2	毛詩注疏刪翼24卷	明316
明	何楷	8	毛詩世本古義28卷	明339
明	郝敬	3	毛詩原解36卷	明178
明	季本	4	詩說解頤40卷	明62
明	黃一正	1	詩經埤傳8卷	明308
明	黃佐	2	詩傳通解25卷	明69
明	顧夢麟	1	詩經說約28卷	明358
明	朱善	6	詩解頤4卷	明6
明	朱得之	1	印古詩語1卷	明74
明	徐光啓	1	毛詩六帖講意4卷	明225
明	徐常吉	1	毛詩翼說5卷	明164
明	沈守正	2	詩經說通14卷	明221
明	鄒泉	5	詩經折衷14卷	明72
明	薛志學	1	詩經傳旨1卷	明452
明	趙一元	1	詩經理解14卷	明201
明	張彩	3	詩原30卷	明183
明	鄧元錫	2	詩經釋3卷	明121
明	唐汝諤	2	毛詩微言20卷	明355
明	范王孫	1	詩志26卷	明433
明	姚舜牧	1	詩經疑問12卷	明299
清	閻若璩	1		人名2207
清	屈大均	1		人名1606
清	江永	1		人名711
清	顧炎武	6		人名1893
不明	王晦叔	1		
不明	邱氏	1		
不明	吳澂	1		
不明	羅中行	2		

朝代	引用學者數
宋	34
元	6
明	20
清	4
不明	4
計	68

附表2：『毛詩補傳』引用宋代以後學者一覽

凡例：

- 本表は、『毛詩補傳』に引用された宋代以降の學者を、各朝代ごとに50音順に並べた表である。
- 「引用回数」は、同一の詩篇の複数の章に引用がある場合はそれぞれ獨立に数えた。
- 「著述録」は、当該學者の詩經學者としての業績を示す代表的著述を選んで挙げた。引用の出典元を示すものではない。
- 「資料來源」は下記の書名の略稱と頁數とを示した。
 - ・『歷代』：劉毓慶『歷代詩經著述考（先秦-元代）』（中華書局、2002）
 - ・『明代』：劉毓慶・賈培俊『歷代詩經著述考（明代）』（中華書局、2008）
 - ・『人名』：張搗之他『中國歷代人名大辭典』（上海古籍出版社、1999）
 - ・『宋人』：昌彼得他『宋人傳記資料索引』（鼎文書局、2001增訂三版）

朝代	學者名	引用回数	著述名	資料來源
宋	王安石	12	詩經新義20卷	歷代145
宋	王應麟	7	困學紀聞	歷代300
宋	王質	1	詩總聞	歷代211
宋	歐陽脩	7	詩本義16卷	歷代133
宋	金履祥	2		宋人1425
宋	邢昺	3	爾雅注疏	宋人1069
宋	嚴粲	33	詩緝36卷	歷代311
宋	項安世	1	詩解20卷	宋人2939
宋	黃彥遠	1	五經指南	人名2088
宋	黃震	1	讀詩一得1卷	歷代314
宋	洪邁	1		宋人1511
宋	黃樞	1	詩解20卷	歷代252
宋	謝枋德	3	詩傳註疏3卷	歷代316
宋	朱熹	254	詩集傳20卷	歷代195
宋	章俊卿（章如愚の字）	1	山堂考索詩說30卷	歷代269
宋	邵雍？	1		宋人1324
宋	徐鍇	1		宋人1013
宋	曹粹中	9	放齋詩說30卷	歷代177
宋	蘇轍	8	詩集傳20卷	歷代152
宋	戴侗	6		宋人4218
宋	張載	5	詩說1卷	歷代156
宋	陳鵬飛	1	詩解20卷	歷代189
宋	程氏	14	詩說2卷	歷代155
宋	鄭樵	1	詩辨妄6卷	歷代182
宋	程大昌	1	詩論1卷	歷代215
宋	范處義	11	詩補傳30卷	歷代211
宋	傅寅	1		人名2325
宋	輔廣	3	詩童子問10卷	歷代278
宋	陸佃	4	埤雅	宋人2649
宋	李棹	8	毛詩詳解36卷	歷代239
宋	劉彝	2	七經中義170卷	人名657
宋	劉敞	2	詩經小傳	歷代132
宋	呂祖謙	11	呂氏家塾讀詩記32卷	歷代230
宋	呂大臨	1		宋人1190

振り捨てられない遺産

			毛詩補傳			毛鄭詩考正				景溪詩經補注			
		詩篇名	引用 有無	學者名	章	編目 有無	引用 有無	學者名	章	編目 有無	引用 有無	學者名	章
				徐常吉 朱熹 劉敞	2 36 7								
		殷武	○	朱熹 項安世	136p 3								
		小計	25			24							
總計			221			118	12						

	詩篇名	毛詩補傳			毛鄭詩考正				景溪詩經補注			
		引用有無	學者名	章	編目有無	引用有無	學者名	章	編目有無	引用有無	學者名	章
	烈文	○	王安石		●							
	天作	○	朱熹	1p	●	○	沈括 王應麟					
	昊天有成命	○ ○	何楷 王晦叔 朱熹	p	●							
	我將	○	王志長		●							
	時邁	○	朱熹	1								
	執競				●							
	思文	○	朱熹	1								
	臣工	○	朱熹 戴侗	1	●							
	噫嘻				●							
	振鷺											
	豐年											
	有瞽											
	潛											
	離				●							
	載見	○	朱熹 黃樞	1p								
	有客	○	朱熹 曹粹中	1								
	武				●							
	閔予小子				●							
	訪落				●							
	敬之											
	小毖	○	朱熹	1	●							
	載芟	○	朱熹 范處義	1								
	良耜	○	朱熹	1								
	絲衣				●							
	酌				●							
	桓	○	李栲	1	●							
	賔				●							
	般				●							
魯頌	駟	○	何楷	3								
	有駟	○	朱熹	1								
	泮水	○	朱熹 戴侗 王安石 徐鍇	1 1 6 6	●							
	閟宮	○	朱熹 王應麟 王應麟	35 4 9	●	○	王應麟	4				
商頌	那	○	朱熹	1	●							
	烈祖	○	歐陽脩									
	玄鳥	○	朱熹	1								
	長發	○	江永	1	●							

振り捨てられない遺産

	詩篇名	毛詩補傳			毛鄭詩考正				景溪詩經補注			
		引用有無	學者名	章	編目有無	引用有無	學者名	章	編目有無	引用有無	學者名	章
			朱熹	4								
	既醉	○	朱熹	45	●							
	鳧鷖	○	朱熹	5								
	假樂	○	嚴粲 何楷	3 3								
	公劉	○	朱熹	5	●							
	洞酌											
	卷阿	○	曹粹中	4	●							
	民勞	○	朱熹 嚴粲 鄒泉 顧炎武	1 12 2 5	●							
	板	○	王安石 朱熹 朱善	5 7 8	●							
	蕩	○	謝枋德 顧炎武 朱熹	2 3 456								
	抑	○	朱熹 何楷	12368 ·10p ·11								
	桑柔	○	朱熹 何楷 蘇轍 范處義 朱善	1237· 13·14 3 5 6·12 ·16	●							
	雲漢	○	朱熹 季本 蘇轍 嚴粲	12 3 6 7	●							
	崧高	○	朱熹	38								
	烝民	○	朱熹	68								
	韓奕	○	朱熹 梁益 邢昺 顧炎武	15 1 2 6	●	○	顧炎武 顧炎武	1 6				
	江漢	○	朱熹 郝敬	13456 3								
	常武	○	嚴粲 朱熹	3 4								
	瞻卬	○	朱熹	167								
	召旻	○	朱熹 蘇轍	2 5								
	小計		29		17							
頌	周頌											
	清廟	○	朱熹	p	●							
	維天之命	○	朱熹	1	●							
	維清				●							

	詩篇名	毛詩補傳			毛鄭詩考正				杲溪詩經補注			
		引用有無	學者名	章	編目有無	引用有無	學者名	章	編目有無	引用有無	學者名	章
	照桑	○	朱熹	4p								
	白華	○	王應麟	3								
	緜蠻	○	朱熹 鄭泉 張彩	1p 1 3								
	瓠葉	○	朱熹	2p								
	漸漸之石	○	朱熹	12								
	芴之華	○	歐陽脩 朱熹	3 3								
	何草不黃	○	朱熹	4								
	小計		61		33							
大雅	文王	○	歐陽脩 朱熹	1 13456 7p	●							
	大明	○	朱熹 朱善 曹粹中	12467 p 6 8	●							
	緜	○	陸佃 程大昌 閻若璩 張載 章俊卿 朱熹	1 2 2 4 6 8p	●	○	程大昌 閻若璩	2 2				
	棫樸	○	程氏 朱熹 戴侗	4 4p 5	●							
	旱麓	○	程氏 朱熹	1 p								
	思齊	○	朱熹 嚴粲	24p 3								
	皇矣	○	程氏 朱熹 嚴粲 呂大臨 梁益	1245 12678p 4 5 5	●	○	嚴粲 歐陽脩	6 6				
	靈臺				●							
	下武	○	蘇轍 朱熹	2 45	●	○	呂祖謙					
	文王有聲	○	朱熹	12p								
	生民	○	許謙 朱熹 許謙 嚴粲 吳澂	1 24567 8 3 7 p	●							
	行葦	○	李栲 輔廣	2 3	●							

振り捨てきれない遺産

	詩篇名	毛詩補傳			毛鄭詩考正				杲溪詩經補注				
		引用有無	學者名	章	編目有無	引用有無	學者名	章	編目有無	引用有無	學者名	章	
楚茨	巧言	○	朱熹 鄒泉	45 p									
	何人斯	○	朱熹 范處義	17 3									
	巷伯	○	朱熹 嚴粲	247p 24	●								
	谷風	○	朱熹	p									
	蓼莪	○	曹粹中 朱熹 王安石 李栲	3 5 6 p	●								
	大東	○	朱熹 朱善	2 4	●								
	四月	○	朱熹 顧炎武 范處義	1245 2 7	●	○	王安石						
	北山	○	朱熹	3	●								
	無將大車	○	朱熹 黃震	2 p	●								
	小明	○	朱熹 謝枋德 范處義	4 4 p	●	○	方以智 張以寧						
	鼓鐘	○	輔廣	1									
	楚茨												
	信南山	○	何楷	1									
	甫田	○	戴侗	3	●								
	大田				●								
	瞻彼洛矣	○	呂祖謙 朱熹	1 p	●								
	裳裳者華	○	朱熹	p									
	桑扈	○	朱熹	14p	●								
	鴛鴦												
	頍弁	○	朱熹	p									
	車鞶	○	季本 朱熹	1 p	●								
	青蠅	○	陸佃	1									
	賓之初筵				●								
	魚藻	○	朱熹	p									
	采芣	○	朱熹 唐汝諤 黃佐	2 5 4	●								
	角弓	角弓	○	朱公遷 劉彝 張載	4 6 7								
		菀柳	○	朱熹	12	●							
		都人士				●							
		采芣											
		黍苗	○	何楷	2								

	詩篇名	毛詩補傳			毛鄭詩考正				杲溪詩經補注			
		引用有無	學者名	章	編目有無	引用有無	學者名	章	編目有無	引用有無	學者名	章
	伐木	○	朱熹	3	●							
	天保	○	戴侗 朱熹	2 5	●							
	采芣											
	出車	○	曹粹中	4	●							
	秋杜	○	王質	2								
	魚麗	○	朱熹	p	●							
	南有嘉魚				●							
	南山有臺											
	蓼蕭	○	朱熹	p	●							
	湛露	○	輔廣	2								
	彤弓	○	呂祖謙 朱熹 劉瑾	1 2 2								
	菁菁者莪											
六月	六月	○	朱熹	1	●							
	采芑	○	程氏	p	●							
	車攻	○	程氏 朱熹	48 567	●							
	吉日				●							
	鴻雁	○	朱熹	12								
	庭燎											
	沔水	○	朱熹 陳櫟	2p p								
	鶴鳴											
	祈父	○	呂祖謙 王應麟	p p								
	白駒	○	嚴粲	1								
	黃鳥	○	朱熹	p								
	我行其野	○	朱熹	p								
	斯干	○	朱熹	145								
	無羊	○	何楷	2	●							
節南山	節南山	○	朱熹 王安石 嚴粲	3459 4 6	●							
	正月	○	朱熹 顧炎武 朱善 胡一桂	145·13 2 3 10	●							
	十月之交	○	朱熹	8	●	○	劉敞 閻若璩 趙子常					
	雨無正	○	朱熹 朱善	1245 5	●							
	小旻	○	蘇轍	4	●							
	小宛	○	朱熹	1245								
	小弁	○	朱熹 呂祖謙	12 8								

振り捨てきれない遺産

		毛詩補傳			毛鄭詩考正				景溪詩經補注				
		詩篇名	引用有無	學者名	章	編目有無	引用有無	學者名	章	編目有無	引用有無	學者名	章
		黃鳥											
		晨風	○	鄧元錫 趙一元	p p								
		無衣	○	金履祥	p	●							
		涓陽	○	嚴粲	p								
		權輿				●							
	陳	宛丘	○	陸佃	2p								
		東門之枌											
		衡門											
		東門之池	○	黃彥遠	p								
		東門之楊	○	朱熹	1								
		墓門	○	薛志學	p	●							
		防有鵲巢	○	程氏 歐陽脩	1p p								
		月出				●							
		株林	○	張彩	1								
		澤陂											
	檜	羔裘	○	蘇轍	p								
		素冠	○	季本 朱熹 黃一正	2 3 3								
		隰有萋楚	○	朱熹	p								
		匪風	○	張載	1	●							
	曹	蜉蝣				●							
		侯人				●							
		鳴鳩											
		下泉											
	豳	七月	○	曹粹中 邵雍? 曹粹中 王安石 邱氏 嚴粲	1 1 2 7 8 p	●							
		鷓鴣	○	朱熹 朱得之	1 2								
		東山	○	朱熹 曹粹中	2 4	●							
		破斧	○	朱熹	p	●	○	程氏 程氏	2 3				
		伐柯											
		九罭	○	朱熹 沈守正	34 p								
		狼跋	○	程氏	12								
	小計			106		44							
小雅	鹿鳴	鹿鳴	○	朱熹	1p								
		四牡	○	朱熹	2								
		皇皇者華	○	戴侗	5								
		常棣之華	○	歐陽脩	5	●	○	程氏					

	詩篇名	毛詩補傳			毛鄭詩考正				景溪詩經補注			
		引用有無	學者名	章	編目有無	引用有無	學者名	章	編目有無	引用有無	學者名	章
齊	雞鳴	○	姚舜牧	3								
	還	○	郝敬	p								
	著	○	朱熹 張載	1 p								
	東方之日											
	東方未明	○	郝敬	p								
	南山	○	蘇轍	12								
	甫田	○	朱熹	3								
	盧令	○	朱熹	3p								
	敝笱											
	載驅	○	朱熹	2p	●							
猗嗟	○	朱熹	1									
魏	葛屨	○	嚴粲 朱熹 王志長	1 2 p								
	汾沮洳											
	園有桃	○	朱熹 季本 張彩	1p 1 1								
	陟岵	○	李栲 朱熹	1 p	●							
	十畝之間											
	伐檀	○	朱熹	p	●							
	碩鼠	○	朱熹 嚴粲	1 3p	●							
唐	蟋蟀	○	歐陽脩	2	●							
	山有樞	○	朱熹	1								
	揚之水	○	劉敞 嚴粲	3 p								
	椒聊	○	嚴粲	p								
	綢繆	○	王安石 朱熹 唐汝諤 王安石	1 2p 2 3								
	秋杜											
	羔裘											
	鷩羽				●							
	無衣	○	嚴粲	1								
	有秋之杜	○	朱熹	1								
	葛生	○	朱熹	3	●							
	采芣	○	朱熹 呂祖謙	2 p								
	秦	車鄰	○	黃佐 呂祖謙	2 p							
駟驥		○	嚴粲	1	●							
小戎		○	范處義	3	●							
蒹葭					●							
終南		○	李栲	p								

振り捨てられない遺産

	詩篇名	毛詩補傳			毛鄭詩考正				景溪詩經補注			
		引用有無	學者名	章	編目有無	引用有無	學者名	章	編目有無	引用有無	學者名	章
王	芄蘭	○	嚴粲 朱熹	1 2								
	河廣	○	呂祖謙 朱熹	p								
	伯兮	○	呂祖謙	2								
	有狐	○	嚴粲	1								
	木瓜				●							
	黍離	○	邢昺 朱熹	1 p								
	君子于役											
	君子陽陽	○	范處義 嚴粲	2 p								
	揚之水	○	朱熹 王應麟	1 p								
	中谷有蓷	○	朱熹 嚴粲 范王孫 范處義 謝枋德	2 2 2 p p								
兔爰												
葛藟												
采芣												
大車	○	朱熹	p	●								
丘中有麻	○	嚴粲	2									
鄭	緇衣											
	將仲子											
	叔于田	○	鄒泉 鄒泉	2 3								
	大叔于田											
	清人											
	羔裘	○	程氏 朱熹	3 p	●							
	遵大路	○		1	●							
	女日鷄鳴	○	朱熹	23	●							
	有女同車	○	羅中行	1								
	山有扶蘇											
	薺兮	○	呂祖謙	2								
	狡童											
	褰裳											
	丰											
	東門之墀	○	朱熹	12								
	風雨	○	范處義	1								
	子衿	○	嚴粲 程氏	2 p								
	揚之水	○	呂祖謙	p								
	出其東門	○	朱熹	p	●							
	野有蔓草											
溱洧	○	嚴粲	2									

	詩篇名	毛詩補傳			毛鄭詩考正				杲溪詩經補注				
		引用有無	學者名	章	編目有無	引用有無	學者名	章	編目有無	引用有無	學者名	章	
	日月	○	沈守正 朱熹	1 p	●								
	終風	○	顧夢麟 徐光啓	1 4									
	擊鼓												
	凱風	○	王應麟	3									
	雄雉	○	朱熹	1	●								
	匏有苦葉	○	羅中行 嚴粲	2 3	●								
	谷風	○	邢昺 鄭樵 呂祖謙	1 1 3	●								
	式微	○	李栲	2									
	旄丘	○	朱熹 王安石	2 4									
	簡兮	○	朱熹	134p									
	泉水	○	朱熹 王安石	2 2									
	北門	○	顧炎武 嚴粲	2 p									
	北風	○	程氏	p									
	靜女		朱熹	3	●								
	新臺				●								
	二子乘舟												
	邶	柏舟	○	朱熹	1								
		牆有茨				●							
		君子偕老											
		桑中	○	朱熹 傅寅	2 3								
鶉之奔奔		○	朱熹 屈大均	12 1									
定之方中					●								
蟋蟀		○	王安石	3									
相鼠													
干旄		○	朱熹	1									
載馳		○	朱熹 李栲 鄧元錫	1 2 2									
衛	淇奥	○	曹粹中 朱熹	1 3	●								
	考槃		朱熹	23p									
	碩人	○	范處義 朱熹	1 4									
	氓	○	朱熹 嚴粲 陳鵬飛	1 5 p	●								
	竹竿	○	朱熹 嚴粲	3									

附表1：戴震詩經學論著宋以後學者引用狀況

凡例：

○本表は、戴震『毛詩補傳』『毛鄭詩考正』『杲溪詩經補注』三書につき、詩篇ごとに宋以後の學者の説の引用狀況を調べたものである。

○「編目有無」は、該書にその詩篇が注釋されているものを●で示した。

○「引用有無」は、該詩に宋代以降の學者の説が引用されているものを○で示した。

○「章」は、宋代以降の學者の説が引用されている章の番号を示した。「124」は該詩1・2・4章を表す。數字の前に「・」を附しているのは二桁の數字であることを表す。例えば「・12」は12章を表す。「p」は各詩篇末尾の篇義を表す。

	詩篇名	毛詩補傳			毛鄭詩考正				杲溪詩經補注				
		引用有無	學者名	章	編目有無	引用有無	學者名	章	編目有無	引用有無	學者名	章	
國風	周南	關雎			●	○	呂祖謙 (引董道)	5	●	○	朱熹 呂祖謙 (引董道) 薛士龍	2345 5 p	
		葛覃	○	朱熹 劉瑾	23 3	●			●	○	朱熹	3	
		卷耳	○	朱熹	p	●				●	○	朱熹	13
		櫻木	○	朱熹	p					●	○	朱熹	1
		蠡斯	○	朱熹	p					●	○	朱熹	123
		桃夭	○	朱熹	3					●			
		兔置	○	金履祥	p					●	○	朱熹 金履祥	1 p
		采芣								●			
		漢廣	○	朱熹 王應麟	1 1	●				●			
		汝墳	○	朱熹	p					●	○	朱熹	13
	召南	麟趾								●	○	朱熹	12
		鵲巢				●				●	○	朱熹	3
		采芣	○	劉彝	1					●	○	朱熹	123
		草蟲								●	○	朱熹	1
		采蘋								●	○	朱熹	123
		甘棠	○	朱熹 嚴粲	1 3					●	○	朱熹	1
		行露	○	陸佃	3					●	○	朱熹	12
		羔羊				●				●			
		殷其雷	○	張載	p					●	○	朱熹	1
		標有梅								●	○	朱熹	1
		小星								●	○	朱熹	1
		江有汜								●			
		野有死麕								●	○	朱熹	13
何彼穠矣	○	王安石 洪邁 朱熹	p p p					●	○	洪邁	2		
騶虞	○	歐陽脩 嚴粲	p p	●				●	○	朱熹	1		
邶	柏舟	○	朱熹	p					25	20			
	綠衣				●								
	燕燕	○	李栲	1									